江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

1

政治、軍事、外交 歴史の研究上貴重

幕末～昭和初年の写真も

代々、伊豆・韮山代官を務めた江川家。江戸時代後期から幕末維新期の膨大な資料の中には日本の政治、軍事、外交史研究上重要なものが含まれ、今年、関係資料3万8581点と写真資料461点が国の重要文化財に指定された。管理する公益財団法人・江川文庫の協力を得て同文庫の嘱託学芸員であり、NPO法人伊豆学研究会理事長、伊豆の国市と伊豆市の文化財保護審議委員を務める橋本敬之さん(62)＝伊豆の国市＝がその一部を紹介する。

【次回から4面に掲載】

江川家は、中世以来の在地領主の系譜を引き、江戸時代のほぼ全期間、旗本として韮山代官を世襲した。現在、伊豆の国市韮山にある江川文庫には、江川家から引き継がれた中世以来の膨大な資料が保管されている。これらは、江川家の歴史はもとより、幕府代官所の職務や支配の実態を知る上で貴重な基礎資料である。加えて江戸時代後期から幕末維新期の資料の中には、日本の政治、軍事、外交史研究上、非常に重要なものが含まれる。

また、幕末から昭和初年頃までに撮影された写真約1100点が保存されている。これらの写真群は、撮影の経緯や場所などが文書等から確認できることが大きな特徴であり、日本の写真史を明らかにする上で不可欠な資料である。

このことから、多くの収蔵品の中でも、古文書や書籍、書画、陶磁器、武器や武具のうち、特に重要な約3万8581点が「韮山代官江川家関連資料」として、写真資料のうち、特に貴重な明治時代前半までの461点が「江川家関係写真」という2本立てで、今年2月27日、重要文化財指定の答申があり、6月19日の官報告示をもって指定された。

文庫の資料調査は、静岡県が文化庁の指導の下、2002(平成14)年度から11年にわたって実施した。この調査によって、古文書をはじめとして多岐にわたる、極めて重要な資料が保存されていることが明らかになった。

本資料群は幕府代官として備えておくべき公文書が中心で、地域の歴史、地域と幕府の結びつきを知る上でも貴重な資料である。特に、幕末、諸外国からの開国圧力が強まる中で収集され、使用された文書や洋書・訳書、図面、銃砲・台場の模型、測量器具などは、江川家が積極的に海防や西洋技術の導入に取り組んでいたことを示す。

江川文庫に所蔵されている写真コレクションの中で一番古い一群は、中浜万次郎（ジョン・万次郎）が撮影したものである。ジョン・万次郎は遣米使節団として派遣された際、写真機を購入して帰国。江川家の江戸屋敷で数多くの写真を撮った。

また、38代江川家当主の英武は、岩倉使節団の一行として米国留学し、その際多くの写真を撮影した。その他、下田市出身の下岡蓮杖などの国内有名写真師のものや、海外の写真館で撮られたものも保存されている。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

重要文化財の江川家住宅

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

2

保元の乱避け 13人伴い韮山へ

日蓮に帰依、住宅に直筆の棟札

江川氏は清和源氏の流れをくむ源満仲の次男頼親を始祖とし、大和国宇野荘（奈良県五条市）に本拠を構え、宇野氏を名乗っていた。平氏の勢力が強くなり、1156年に起こった保元の乱の時、乱を避けて伊豆に入り、韮山（伊豆の国市韮山）八牧の地に落ち着いたといわれている。この時、9代親信で家来13人を伴っていた。

1185（治承4）年、源頼朝が伊豆で旗揚げをしたとき、子吉治が頼朝に従い、江川荘を賜ったという。16代英親はその頃、伊豆に流されていた日蓮に深く帰依し「うばそくにつきゆう優婆塞日久」と号し、本立寺（江川氏累代の菩提寺）を開いた。この時期に江川氏の家屋を建設し、日蓮直筆の棟札を賜った。そのお陰をもって、江川氏の住宅は地震や火災などの被害に遭ったことがない、といわれている。

この御利益のある棟札の写しを所望する人が引きも切らず、版画で刷って渡すことにした。1781（天明元）年に受け取った人がいるというのが最も古い記録である。また、76（明和4）年、河村岷雪（生没年不詳）が描いた『百富士』に今と同じたたずまいを伝える絵が描かれている。

鎌倉時代の様子は家譜に記載されていることしか分からず、信憑性もないと思っていた。しかし、近年の調査により、天文・法華の乱を伝える京都からの書状が何通か残っていること、後北条家の虎の印判の残り状況からすると、伝説に言われていることの真実味が増してきた。

室町時代に至り、23代英住は伊豆国守護の山内上杉氏に仕え、1493（明応2）年秋に北条早雲が伊豆に侵攻すると、その家臣になった。この時、早雲に江川酒を献上し、養老の酒のようだと賞美を受けた。

1551（天文20）年には立野郷（下田市）30貫文の安堵を北条氏から受けている。江川家周辺の金谷郷をはじめとする領地を認められた。徳川幕府支配になって、立野は除かれるが、金谷、山木など13か村4908石の支配地を持つことになり、これは旧領地としている。北条氏からの領地を安堵され、徳川幕府になって、代官支配地として認められたため、ここから上納される年貢の十分の一を受け取る権利を得たものと思われる。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

木版刷りの日蓮直筆の家作棟札

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

3

英龍の不屈と苦悩表す自画像

多くの絵画残すも家族描かず

江川英龍（号・坦庵、通称・太郎左衛門）は多くの絵画を残している。そのうち、「伝江川坦庵自画像」「富士山画賛」「甲州微行図」はすでに、1967（昭和42）年10月静岡県指定文化財となっていたが、このたび、国の重要文化財にこれらも含めて一括指定された。

「伝江川坦庵自画像」は絹本淡彩で、縦20・5㌢、横15・6㌢の一幅で、やや右を向いた英龍の顔を大きく描いている。顔の輪郭線や皺の横線は極めて強く、着衣には細い輪郭線を施し、中墨で塗っている。大きなわし鼻、引き締まった口元など特徴をよくとらえ、淡い代赭（たいしゃ）（はだ色）を施し、口唇にはやや濃い代赭を入れている。英龍の不屈と苦悩の表情が表現されている。

近年の調査では、江川家の手代で日本で初めて米国へ渡った咸臨丸を描いた鈴藤勇次郎の筆ではないかと思われる資料が発見されている。これは、自画像といわれているもので、残念ながら本当に自画像かどうかの確証はない。しかし、「甲州微行図」に描かれた英龍は、自筆であるので、意図していないが、まさしく自画像である。

英龍は多くの作品を残していて、手代の柏木平太夫も描いているにもかかわらず、父・英毅との合作はあるが、父の肖像はない。家族を描いたものは、唯一、妹のお京だけで、しかも幼い時のものである。

このような中で、英龍の自画像が発見され、また、後世描かれた肖像画も残されている。これらを幾つか紹介したい。ここで紹介する1枚は、英龍自身をデフォルメして、大きな目と鼻の特徴をそのまま描いた自画像である。どの絵もこの特徴が表現されている。

英龍は1855（安政2）年1月16日に没する。57（同4）年1月16日、英龍の3回忌に合わせ、外国掛・岩瀬忠震（ただなり）（1817～61年）が江戸の画家松本亀岳（きがく）に描かせ、自身で賛を入れたものがある。やはり、同じ志を持って外国に対峙しようと頑張った姿を描き、残したかったのではないか。

岩瀬忠震は旗本設楽家の三男で、同じく旗本の岩瀬家の養子となった。母は林述齋（はやしじゅさい）の娘で、幕臣きっての俊才として知られ、昌平坂学問所教授などを歴任した後、海防掛目付に登用された。58（安政5）年に日米修好通商条約の全権委員となり調印を果たした。

その他「病床刀を見る図」、大国士豊が描いた肖像画、明治42年、没後55年に反射炉顕彰会が大藤彬に描かせた「布衣姿の坦庵像」、門人が描いた「布衣姿の坦庵像」は多くの方々に配付したので、お持ちの家庭もあると思う。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川英龍が残した自画像の一枚

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

4

完全な形で残る唯一の反射炉

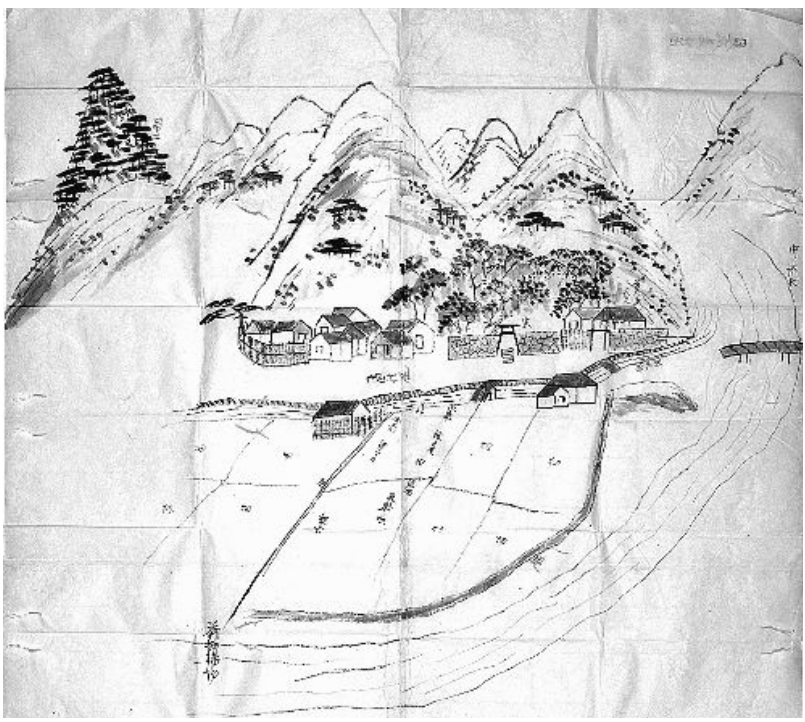
英龍が当初、下田で築造検討

反射炉は、伊豆の国市中、字鳴滝に幕末に築造された。1922（大正11）年、国指定史跡となって現在も保存されている。反射炉は、銑鉄（せんてつ）を溶かして炭素などの不純物を減らし大砲を鋳造した熔解炉である。熱や炎を湾曲した天井で反射させて鉄の熔解温度1500度以上を出すように工夫されているので反射炉と呼ばれる。

日本で反射炉は萩市と伊豆の国市にだけ残るが、当時のものが完全な形で残るのは日本唯一で、実際に稼働したのも伊豆の国市のものだけである。炉は外面が伊豆石で積まれ、内面は耐火煉瓦（れんが）のアーチ積みで2基ずつ、4基がL字状に配置され、その上に煉瓦を積んだ煙突があり、炉と煙突の部分を合わせ高さ15・6メートルある。現在は、鉄を溶かす炉だけが残っている。反射炉で溶かした鉄は、鋳型に流し大砲などに加工した。近年、鋳造に使う砲弾の鋳型が発掘調査で発見されている。

戦乱相次ぐ18～19世紀の欧州で発達した高炉（溶鉱炉・鉄鉱石精錬炉）で大量の銑鉄が生産されるようなった。これにより鉄の鋳造が盛んになると、大型の鋳造用溶融炉として反射炉が出現した。それ以前の大砲は青銅製でコストが高かったが、反射炉の出現により、安価な大型の鉄製砲の量産が可能となった。

日本に、オランダ人ヒュゲエニンが著した『ライク王立大砲鋳造所における鋳造法』が輸入されたのは天保初年（1830年代前半）で、佐賀藩主鍋島直正と江川英龍の交流において翻訳された。反射炉研究は英龍が始めたが、幕府から資金を調達した佐賀藩が1850（嘉永3）年に成功させた。佐賀藩主鍋島直正が英龍に教授を乞い、英龍が積極的に協力した。反対に韮山反射炉建設では英龍没後に佐賀藩技師が韮山に来て応援した。



下田反射炉建設予定地の絵図

まず佐賀藩で反射炉が完成した。53（嘉永6）年のペリー来航により、国防の必要性を感じた代官英龍は、手代八田兵助を同年6月佐賀藩へ派遣した。同人は長崎で情報収集を行い、再び佐賀へ戻り、反射炉にて36ポンド砲鋳造の見学後、韮山へ帰った。

これを受けて同年7月、「反射炉御取立方之義ニ付申上候書付」で、英龍は佐賀藩から技師を呼び寄せ、その上で下田辺りで大筒の製造に取り掛かり、内海台場へ据え付けたいとして建議した。その後、11月に銅、錫（すず）、銑鉄、地鉄、および反射炉、水車などの建築費を入れて、金3773両余の見積書を提出した。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

5

米艦隊入港避け 韮山へ移転

反射炉－地元土製煉瓦を利用

反射炉は炉の天井を耐火煉瓦でドーム状に積み、その反射熱を利用して高温度を得る仕組みである。その耐火煉瓦は焼石といい、土を固めて素焼きにし、これで築造するのである。

また、砲身に穴を開ける錐入れに水車を利用するためには川通に仕立てなければならないので、賀茂郡本郷村が適地であるとした。さらにここなら製品の運搬、土の輸送にも好都合であるとした。

こうして、当初1853（嘉永6）年、賀茂郡本郷村高馬（現在の下田市）に築造の基礎工事が進められ、銑鉄を使って台場据え付けの大砲製造に取りかかるよう指示がなされた。しかし、浦賀から下田へ回ったペリー提督ら米国艦隊の入港があり、軍事機密が洩れることを恐れ、田方郡中村字鳴滝（伊豆の国市中）に移転することになった。

54（嘉永7）年4月に下田からの移転願を提出し、すぐに韮山で着工することとなった。同年11月4日に発生したいわゆる安政の東海大地震では格別の傷みも見えないぐらいであった。しかし、翌55（安政2）年7月29日に襲来した大風雨では、接合面の粘土が剥がれ崩落してしまった。原因はやはり地震で、煉瓦の接合面がゆるんでいたためであった。

そのため、築き直しを余儀なくされ、それまで建築の途中であったものを全部取り崩して、57（同4）年11月にようやく完成した。下田からの移転から、韮山での着工までを英龍は見届けたが、55（同2）年1月に完成を見ないまま没してしまった。

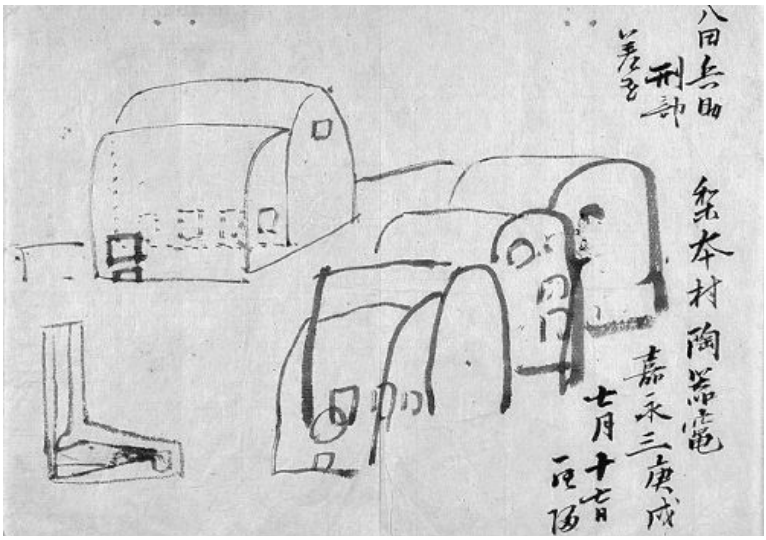
炉内の反射面に使われる耐火煉瓦は、天城山中梨本（河津町）で産出した粘土を利用した。天城山狩猟図に炭窯の絵が描かれている。天城山中の梨本に良質の耐火煉瓦があることは、恐らくこれら炭窯の焼土を観察し、反射炉の耐火煉瓦として十分使えると踏んだのではないだろうか。英龍の日常は全てを観察し、判断することで終始している。

記録に残る弘化年間に天城山猟などをしきりに行っていた成果として、反射炉建造計画は佐賀藩で成功した1850（嘉永3）年の段階で、すでに伊豆での築造構想が広がり、実行に移しつつあった。同年には梨本の煉瓦窯で煉瓦が焼かれていることを見届けている。しかし、炉内以外の部分で煉瓦を使うところは、中村土製を利用した。煙突（烟窓）になる部分は、中村土製ばかりを使っている。

当初、梨本産と、下田の反射炉建設時に使う予定だった一条村（南伊豆町）産煉瓦を輸送する予定であったが、両者は輸送費がかかるのと、現在反射炉が設置されている中村の土が一条村のものと同質のものと判明し、中村のものを利用することとなった。

一条村の煉瓦は、伊豆西海岸を船で輸送し、すでに三津湊（沼津市）まで運ばれていた。しかし、ここから陸路を使って韮山まで運搬しなければならず、膨大な費用がかかると判断、それなら同質の中村の土で煉瓦を焼いた方が安くできるということで、三津まで運ばれた煉瓦は海に捨てられた。この捨て賃を含んでも、中村製の煉瓦を使うこととなった。

明治維新後、近代国家として地方でも殖産興業が広く行われるようになる。この時、中村では煉瓦を焼き、売り出した。この経験が生きている。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



嘉永3年に描かれた梨本陶器窯の図

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

6

風雨に備え白亜の漆喰で補強

多くの大砲鋳造 8年で廃炉

反射炉の築き直しには、まず目論見帳が提出された。それによると、太さ18～25㌢、長さ約1・8～2・8㍍の松杭を896本打って土台を固め、その上に反射炉を据え付けた。煉瓦は瓦職人が延べ2903人で積んだ。佐賀藩で最初に建造した反射炉も漆喰で固めていたようだが、韮山反射炉の場合、大地震や大風雨で目地の粘土が弛んだこともあり、煙突の周囲は左官職人が延べ470人を使って漆喰で塗り固めた。

さらに漆喰の中に棕櫚縄を格子状に並べ、補強したものである。今ある姿は煉瓦を支える鉄骨トラスをめぐらしているが、建設当時の補強は白亜の漆喰であった。ヨーロッパでは日本のような暴風雨に遭うことはないので、このような措置をとる必要はなかったが、日本・韮山での独自の工法である。

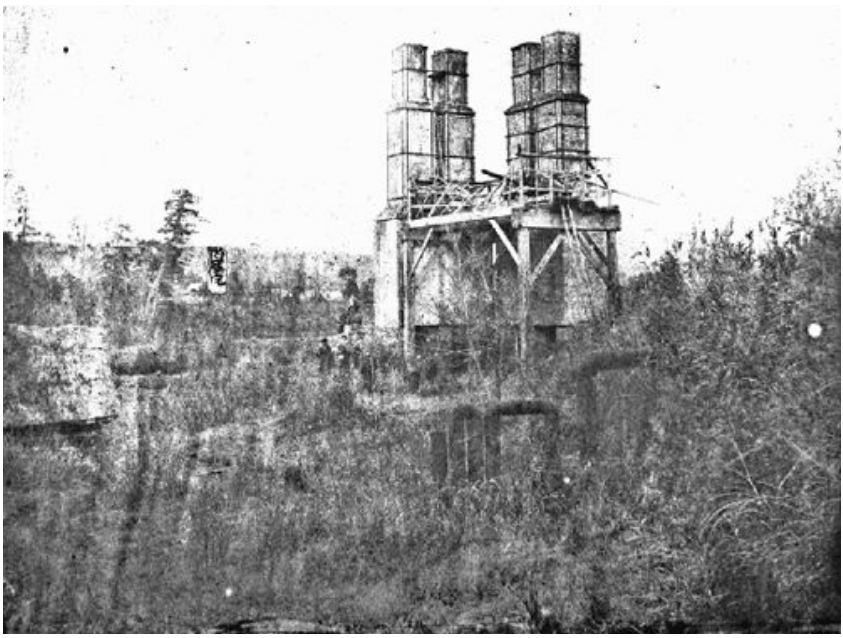
溶解する銑鉄の入手先は石見（島根県）と南部（岩手県）に求めた。伊豆半島の内陸部に位置するため、これら原料である銑鉄、製品の輸送は狩野川が利用された。当時、狩野川では舟運が行われていた。1858（安政5）年3月30日、反射炉製の18ポンド砲の試射に成功した。約7年間に数多くの大砲が鋳造され、沼津港から、伊豆半島の南端を迂回して、品川台場には28門が配備された。

タールを大量に生産したが、これは、大砲のさび止めに使用された。63（文久3）年に描かれた「反射炉小屋場麁絵図」があり、反射炉、水車を使った大砲、玉製造の工場群だったことが分かる。下田に設置する予定の反射炉も同様であった。年不詳資料ではあるが、すでに14門が鋳造された記録が残り、それには鉄製かどうかも不明であるが、そのうち4門は錐による穴開け作業が行われていたことが分かる。

64（元治元）年8月、韮山反射炉の閉鎖が決定した。大小砲は全て幕府の掌握のもと行われなければならないという名目のもと、陸軍奉行小栗上野介が管理することとなり、大砲鋳造事業は個人レベルでは行えなくなったのである。そして、75（明治5）年兵部省に移管された。

56（安政3）年に作成された見積書をもって当時の工事の様子、姿を再現してみた。見積もりはその通りの物量、人足より大抵多くなっている。例えば、切石を使うことになったが、余ったものもあった。反射炉が稼働していた当時は、反射炉敷地内に置かれていたものと思われるが、64（元治元）年反射炉が閉鎖になると、67年（慶応3）年、余った反射炉用切石を江川邸内に運び、東蔵の土台石に利用した。閉鎖されてのち使うのは、公私の区別をしっかりする江川家らしい対応である。

品川台場の建設、反射炉建設や大砲の鋳造という、当時の公共事業は、地域経済を潤した。また、足かけ8年間しか稼働しなかった韮山反射炉が廃炉となっても、今なお、建設当時の姿で残っていることは素晴らしいことである。



1872（明治5）年兵部省引き渡し当時の反射炉

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

7

ペリー再来に備え 品川台場築造

英龍、ロシアとの交易を提言

今年は品川台場着工の160年目の節目の年である。台場とは外国艦船攻撃のため海岸に築く砲台場のことをいう。品川台場は、ペリー再渡来に備えて築造された。当初は浦賀水道を封鎖する計画であったが、工事日程の関係でペリー再渡来の予告1年以内では不可能であることから、江戸市街地のみを主眼に置いた品川から深川にかけて整備することとなった。計画では当初12基の築造であったが再度の変更により6基となった。

1853（嘉永6）年6月、米国大統領フィルモアの国書を携えて、東インド艦隊司令長官ペリーを乗せた4隻の軍艦が浦賀沖に来航した。4隻には大小合わせて63門の艦載砲が装備され、江戸湾を防備する各藩の備砲では太刀打ちができるものではなかった。

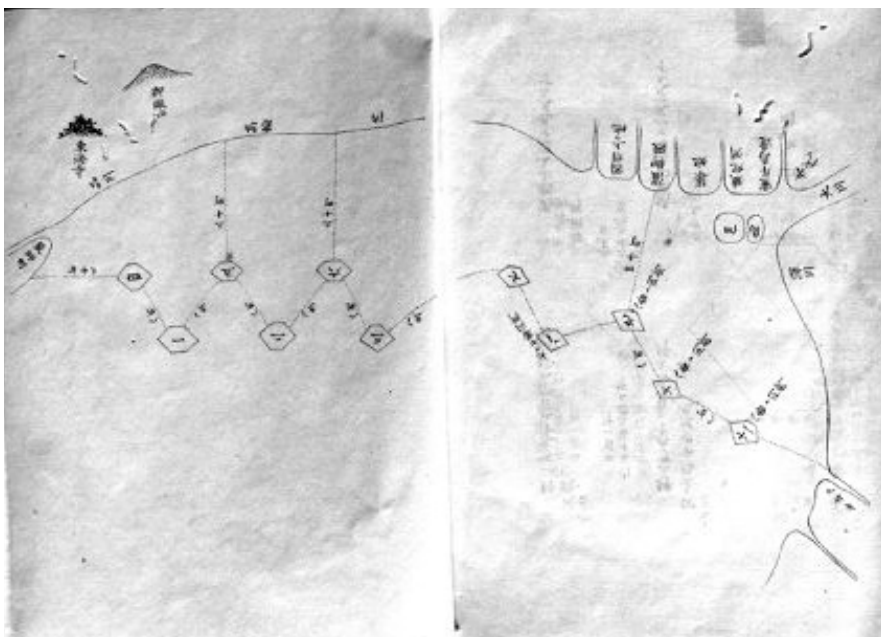
米国艦隊の威力に屈し、やむなく大統領の親書を受け取らざるを得なかった幕府に対して、ペリーは翌春の再来航と親書の回答を受け取ることを約束して琉球へ向かった。幕府はペリーに対する返事に悩んでいたが、英龍は同年9月、水戸斉昭の進言に再考を促し、「米国にはその回答期限を延ばし、ロシアとの交易を許可し、カムチャツカに出て貿易すべき」と提言した。

老中阿部正弘を中心とする幕閣はペリー退去後、すぐに英龍や勘定奉行川路聖謨（かわじとしあきら）らに命じて相模から安房の海岸線巡視を行った。これにより、浦賀水道の防御案を答申した。富津州先（千葉県富津市）から旗山崎（神奈川県横須賀市）の間に9基の台場を築造する計画を出したが、この案だと莫大な費用がかかる上、完成まで20年は要することが明らかであった。次善の策として、品川漁師町（品川区）から深川洲崎（江東区）にかけて海上に11基、御殿山下に1基の合計12基の台場を築くことが決まった。そして、7月23日台場築造の担当者に英龍ほか64名が任命された。

同年8月に作成された「品川沖新築御台場方割」によると、台場建坪約12万7500坪余、海中大杭松丸太3、4間くらいの丸太を打ち込み、縄でつなぎ、水底から水際まで伊豆石を突き立て、その中に砂利を交ぜ、2間築き上げ、その上に高さ4間余の石垣を築き、水際より水底までふんばり5間を残石にて築き上げ、周りに石留、乱杭を打ち込む設計であった。作業は急を要し、1～3番、8番台場は当年中の完成計画で進んだ。

1～3番は6年8月に起工し翌年4月に完成、5、6番は翌54（嘉永7）年1月に起工し12月17日に竣工。以後、予定された台場築造は行われなかった。第4台場と第7台場の工事は中止し、「品川沖新築御台場方割」にない御殿山下台場の完成を急いだ。第7台場は未完成、第8台場以降は未着工で終わった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



嘉永6年「品川台場方割」図

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

8

英龍は模型作り 台場築造を建議

「大場の久八」に人集め依頼

英龍は、台場築造の建議のために、まず模型を作った。実際に完成した台場の形と違うが、模型の中心部分の五角形と六角形が基本となっている。資材の石は三浦石（神奈川県産）が使われる見積もりであったが、実際には神奈川県真鶴をはじめ伊豆を含む20カ所以上から集めた。

石材の産地調査として、江戸城を築城する時に使われた石材の切り出し、調達先を古い文献を使って確認している。海岸線巡見でもそうであるが、事業に取りかかる前、また、建議をするにあたって、全て事前調査を行うのが英龍の基本である。

松、杉の杭木3万2205本・雑木8955本が必要と見込まれ、これは関東一円の御林から調達された。初入札が1853（嘉永6）年8月22日に勘定奉行松平河内守役宅で行われ、開札の結果、大工の棟梁（むねはり）平内（ひうち）廷臣（まさおみ）が8950両で落札、同月28日沙汰となった。

さらに台場に設置する大砲が必要で、「内海御台場御普請並大筒鋳立御用掛」を仰せつかり大砲の鋳造も行うことになった。これにより、反射炉が必要となった。正式には内海台場というが、品川寄りのみ完成したので通称品川台場という。台場は大砲を据え付け、江戸湾の守りに使われるため、それぞれの台場に各藩の人員が配備され、火薬庫など必要な施設が設置されていた。

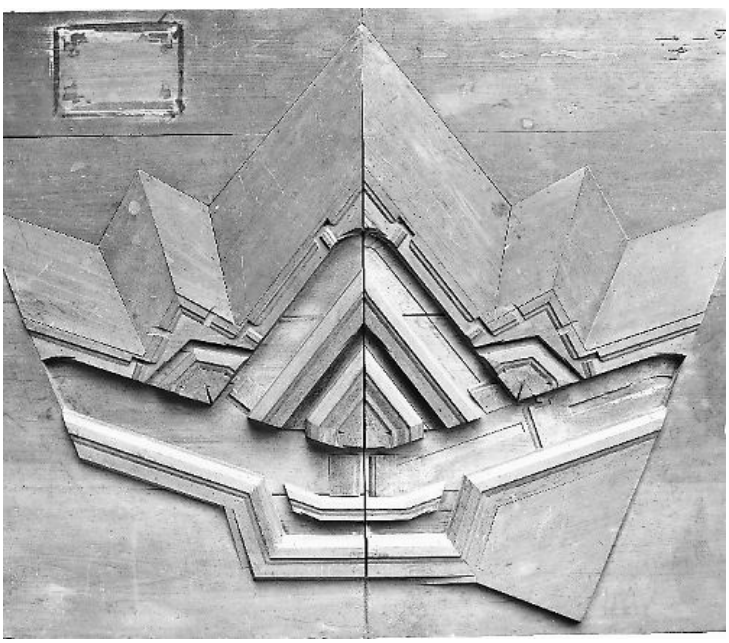
当初の守りは第1台場川越藩、第2台場会津藩、第3台場忍藩、第5台場庄内藩、第6台場松代藩、御殿山下は鳥取藩と全国諸藩が固めた。第3台場のその後の守りは、63（文久3）年高崎藩、64（同4）年宇和島藩、68（慶応4）年高崎藩という変遷となった。第6台場は当初の松代藩に代わって61（万延2）年福井藩、64（文久4）年再び松代藩、66（慶応2）年には2月高崎藩、8月白川藩、慶応3年松代藩、68（同4）年津山藩となっていた。

各藩の負担軽減が狙いであろうが、このような守備体制では江戸を守ることは不可能だったと思われる。第3台場には砲門46門が備えられたし、第6台場の残された松代藩に関する史料によると、屯所（番士休息所）、火薬庫を持っていた。

資金は幕府の出資、資材の入札は終わったが、急を要する工事のため人足集めが大変で、英龍は、侠客である大場の久八を利用した。大場の久八は本名を森久治郎といい、間宮村（函南町）に生まれた。大前田英五郎（上州）、丹波屋伝兵衛（勢州、伊豆韮山の生）らと交流、血盟兄弟、上州三大親分となった。豆、駿、甲、相、武、野州6か国に縄張りを持ち、子分3600人余、有名貸元49人といわれ、近世侠客の大頭目となった。

安政の大地震には、兄弟分の大前田英五郎と協力して、義援金数百両を募って窮民を救ったという。台場の建造に力を尽くしたので「台場の久八」といわれ、生誕地である間宮村の隣村に大場村があるため「大場の久八」といわれるようになった。

昭和30年代以降、東京湾の埋め立てと開発が進み、それぞれの台場は埋め立て中に埋没したり、船の航路を確保するために撤去されたりして姿を消したが、現在は、第3台場（お台場公園）と第6台場の二つだけが史跡として保存されている。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



英龍が建議のため作った木製の台場模型

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

9

英龍が終身固持した母の教え「忍耐」

受け継いだ念珠、死後共に埋葬

江川英龍の母は謙虚で穏やかな性格の人であった。義父母や夫に従い、女子の教育では常に「敬順」の2字を中心に据え、男子の教育では、文武の業に励むことを厳格に行い、少しも溺愛することがなかった。そのため、英龍の後の偉業の樹立が一般に知られるようになったのは、母のそのような教育によるところが少なくない。

かつて、英龍が13、14歳のころ落馬し右の腕の骨を打ち違え「腕を痛めたため、塗り薬を欲しい」と訴えた時、母は少しも驚くことなく、腕に薬を塗りながら「単に馬術のみならず、修業というものにこのようなけがはつきものです。古来の人『三たび肘を折りて良医となる』の例えがあります」と言って励まし諭したという。このことから母の性質をたやすく知ることができる。

英龍は幼いころから父母を尊敬していたことは天性からのものであった。そのことを物語る話として、母・久(安藤＝実家の姓)がある時縁側に出て爪を切っていると、庭前でたわむれていた英龍は、縁先から落ち散った爪を一つ一つ拾い集めていた。母は笑いながら「何をなさっておいでになるのですか」と質問すると「母君の爪を踏むとは、母の一部を踏むことになりもったいないことなので、拾っているところです」と答えたという。

1830（天保元）年、母逝去。母は病気が差し迫ったとき、初めて英龍を枕元に呼び寄せ、首に掛けていた念珠をはずして「わが子の文武の業等には少しも心配していません。しかし、ただ一言だけお話しさせてください。それはあなたのことだけではないのです。物事全て、およそ人の道を成し遂げようとするときには何事にも堪え忍ぶことから始まるのです」

英龍自筆の座右の銘「忍」

「願うことなら、あなたは、公務はいうまでもなく、何事にも自分の才能におぼれることなく、どのような小さなことから大きなことまで忍耐することができる人となることを望みます。だからといって、あなたが才能に頼っているというわけではありません。青年は才能があってもなくても物事に堪え忍ぶことが難しいといっているのです。今からずっと将来にわたり、私のことを思い出してくださるのなら、この念珠を私だと思い、今宵言ったことを思い出してください」と、念珠を英龍の手に渡し、そのまま息を引き取った。

この遺言を終身固く守り、いつでも念珠を離すことなく、死んだ後、遺言として念珠も一緒に埋葬した。英龍が幕府の役職から遠ざかっていた時期、ひたすら「忍」の一字であったが、この間、韮山塾を開設し高島流砲術の普及、実地訓練としての山猟などで力を蓄え、ペリー来航による幕府の危機に大きな力を発揮することになった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

10

全国に名をはせた清酒「江川」

戦国大名らに献上、記録に残る

江川氏は、大和国宇野より酒造技術を持って韮山に至った。『寛永家譜』などによると、鎌倉北条時頼の時代、すでに酒造を行ったが、その後途絶えていた。北条早雲が韮山城に入ったころ、24代英盛の弟正秀（1532＝享禄5年死去）が奇法を得て醸造を行い、これを早雲へ献じたところから、江川酒の名前が始まったとされる。

それ以後、戦国期、酒造業を営んで発展し「江川酒」は戦国を代表する銘酒となった。北条氏は戦国大名へ清酒「江川」を進物としてしきりに使った。例えば「結城家新法度」によると56（弘治2）年、江川酒の記述があることから常陸・結城に運び込まれ京都の公家の日記『言継卿記』に駿府の今川家に立ち寄った山科言継に江川酒を振る舞ったことから、56（同2）年から57（3）年にかけて清水、駿府にも運ばれた。69（永禄12）年と推定される「北条氏政書状」によると、上杉輝虎に対してミカン1箱と江川酒1荷を進呈している。

90（天正18）年「北条家朱印状」では、相模国千津島（神奈川県南足柄市）の人足が韮山の江川氏から酒の大樽を受け取り小田原城まで搬入するよう命じられたことが記されている。

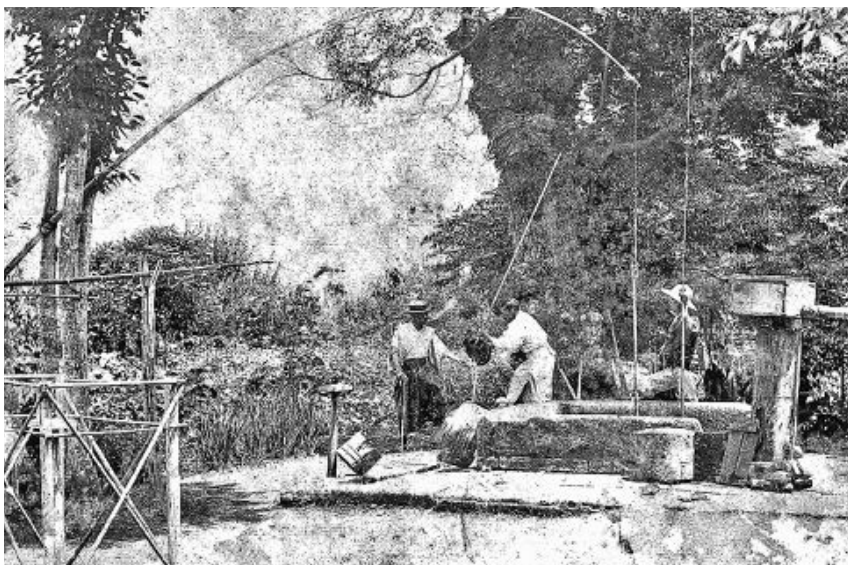
そのころの江川氏は酒造家として活躍し、北条氏関係の文書にはもちろんのこと、北条氏はもとより結城政勝、今川義元、織田信長、徳川家康、上杉謙信などに贈答品として贈られ、『言継卿記』や連歌師・里村紹巴、豊臣秀吉の文書にもしばしば銘酒として記載された。

里村紹巴『富士見道記』には69、70（永禄12、13）年に、里村紹巴に北条氏康と氏綱から江川酒を贈られたことが記され、『甲陽軍鑑』に71（元亀2）年、北条氏政から武田信玄に江川酒が贈られた、とある。

93（文禄2）年、豊臣秀吉は四反帆一隻にて肥前名護屋に江川酒を送らせている（熱海市網代・岡本家文書）。その酒は全国的に有名な銘酒として「江川樽」と呼ばれて京都でも珍重された。「甫庵太閤記」に98（慶長3）年には京醍醐に江川酒を運んだ記録がある。『鹿苑日録』によると、1601（同6）年、京都相国寺鹿苑院主が伏見に運ばれた江川酒を飲んでいる。

徳川家康が駿府にいる時、豆州北条の郷（江川家のある西側に広がる地域）で鷹狩りの巡見に来たので、江川酒と白餅を献上したところ「汝が井、軽水にて酒に叶い、養老の酒ともいうべきもの」として、河原の野菊を採って渡し「今後、これを江川の家紋とせよ」とのことで、以後、井桁に菊の家紋に改め、酒の献上を行った。

このように、全国に名をはせた江川酒は、近世に入っても珍重され、47（正保4）年の、俳句の季語を集めた『毛吹草』には、大阪に入津する諸国の産物の内に「拵川酒」をあげている。江川家は幕府に、酒とともに筆の献上を行っていたが、年貢収入の一部を受け取る方法ではなく、切米渡しとされた。年貢が直接浅草に運ばれることになり、江川家に米が残されることがなくなったので、醸造を終了せざるを得なかった。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



酒造を行ったと伝えられる井戸の井戸替行事（昭和初期撮影）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

11

動植物や家人 身近な風景を活写

英龍は観察眼発揮、絵画多数残す

英龍には陽三郎という叔父がいた。父英毅の弟で、関川家に養子に入ったが、英龍兄弟、江川本家のことを非常に気にかけ、たくさんの手紙をやりとりしている。また、父英毅も、陽三郎に手紙をたくさん出している。例えば、「芳次郎（英龍の幼名）認め候画二枚差遣わし候」などと書いて陽三郎に送っている。英龍の画帳に「英龍ノダヨ」と書いたものがある。

1811（文化8）年、11歳になった時、父英毅は「英龍」と命名した。またこの時、花押も決めた。英龍はまだ花押も書けず、墨で花押らしく表現して横に「花押」と書いた。このような状況から、この画帳は、英龍の命名当時のものと考えられる。このなかに、かわいらしい妹「お京」がご飯を食べている様子を描いている。描かれたお京の幼さからも、当時の画帳と考えられる。

英龍は、植物、動物、昆虫、魚貝類、鳥類などを観察して描いた。これらの絵は図鑑そのものである。それぞれの絵はほとんど実物大で、観察した様子を注記している。さらに観察眼は人物にも及んでいる。ちょっとした人々の仕草を、手元にある紙の端切れにも描いている。いつでもどこでも観察の眼を持っていた。

江川家はものを大切にする習慣があり、また、英龍の院号を修功院といったが「修功院様」のものとして特別に残したものもある。そのため、英龍の描いたものはほとんど残っているといっても過言ではない。

人物画の基本は恐らく谷文晁（ちょう）から学んだものであろう。文晁から中国故事の画本をもらい、それらを模写した形跡がたくさん残されている。また鶴の足のほか、人の足の動きをたくさん練習。手の動きなどを含めて、部位を観察し、デフォルメした絵を完成させた。

英龍が幼年期に描いた絵

絵は、家人の生活の一こまを切り取ったもの、野外での職人の仕事ぶり、農作業の様子、子どもの遊びに至るまでさまざまな角度で描いている。例えば子どもの遊びでは、指相撲から腕相撲、首相撲、頭相撲まで、子取り鬼、正月の凧揚げ、羽子板など、どれをとっても活写されている。

家人の生活では、あくびをしている女性、針仕事をしている女性、寝ていて暗闇でものを探している様子、子どもがおじいさんの眼鏡を取り上げ、おじいさんが困っている様子など、挙げたらきりがない。

砲術訓練の絵は、遠近法を利用して描いている。指揮を執っているのは英龍自身と思われ、冑（かぶと）に井桁（いげた）菱の家紋が見える。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

植物学者に匹敵 英龍の細密画

庭の草や野菜、あらゆる物が対象

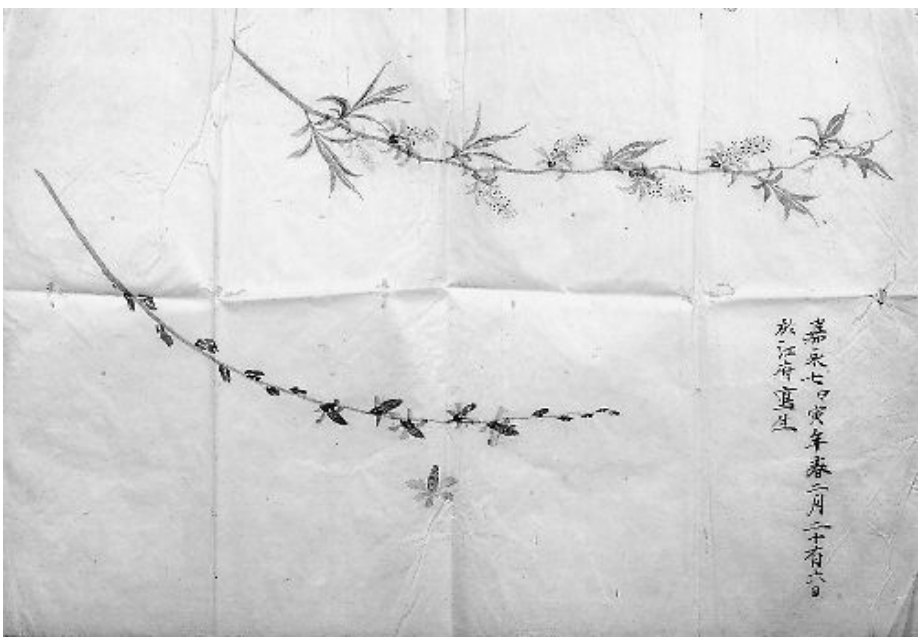
英龍はさまざまなものを描いた。その絵は非常に細密で、植物学者が植物の状態を知るために描いたものに匹敵すると思われる。まさに図鑑である。

1847（弘化4）年2月12日、庭園に珍しい土筆（つくし）の頭が二つあるものが生えた。これを早速描き、横に普通の土筆を描いた。英龍は画家でも植物学者でもないので、描いた年号があるものは少ない。しかしこの土筆は特別なので、描いた期日をしっかり記録しておこうとしたのである。

同じ紙幅に描かれた三七草（さんひちそう）は8月下旬に花が咲いた。これを実物大で描いた。葉の付き方、花の咲き方、つぼみの様子、花はタンポポのようなもので、その一片を取り、それも描くことで、花の集合体が分かるようにしている。全てに着色するわけではなく、必要な部分だけに色を付けている。

年号記載のあるのは、先述のものと54（嘉永7）年2月26日に江戸屋敷において写生したネコヤナギの絵が残る。英龍は翌55年（安政2）年1月16日死去した。その前年に描いたものである。53（嘉永6）年にペリーが浦賀に来航、同年6月から翌54年10月にかけて品川台場の築造と多忙を極めている間をみて、描いたものだ。

英龍は何でも描いた。庭の草、野菜などあらゆるものである。主に美濃紙をつないで巻物にした長紙に実物大で描いている。紙幅に収まりきれなければ、その部分に紙を貼り、全体を描こうとした。そのため、つる性の植物などは、横に延々と描き続けている。虫食いもそのまま活写した。しかし、画家のように完成させた絵はほとんどない。それは観察して、必要なところだけ描けば十分だと考えたのであろう。三七草もそうであるが、彩色も完成させていない。



1854（嘉永７）年江戸役所で描いた植物画

『芸術新潮』2013年9月号の「アートニュース」欄を英龍の描いた絵が数多くにぎわし、その中にたくさんワラビを描いた1点が掲載された。

江川家には文晁（ぶんちょう）、または門人が描いた模本（もぼん）（中国の絵を模写して作った本）類がたくさん残っているが、全て完成させたものは少ない。文晁は、英龍が習画するのに、必要な部分だけ完成しておけば、後はそれに従って描くことができると考えたのではなかろうか。これと通じるところがあるが、あくまでも観察画として位置付ければ、全てを描く必要がなかったといえる。

メヒシバという植物は雑草と考えてよい一つである。これなど、紙面いっぱいに書きとどめている。邸内のミョウガ、スイセン、シャクナゲ、ビワ、何でも描いた。中でも一番得意とするのは山桜であったと思われる。妹が嫁ぐときには、雛屏風（ひなびょうぶ）にして持たせた。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

13

描く対象に向けた英龍の慈しみ

周囲の人々の生活写す絵画多数

英龍は代官であり、その仕事を全うした。さらに国防・海防のためのさまざまな建議を行った一方、多くの絵を描いた。その絵は植物画に代表されるように、全て観察に基づくものであった。

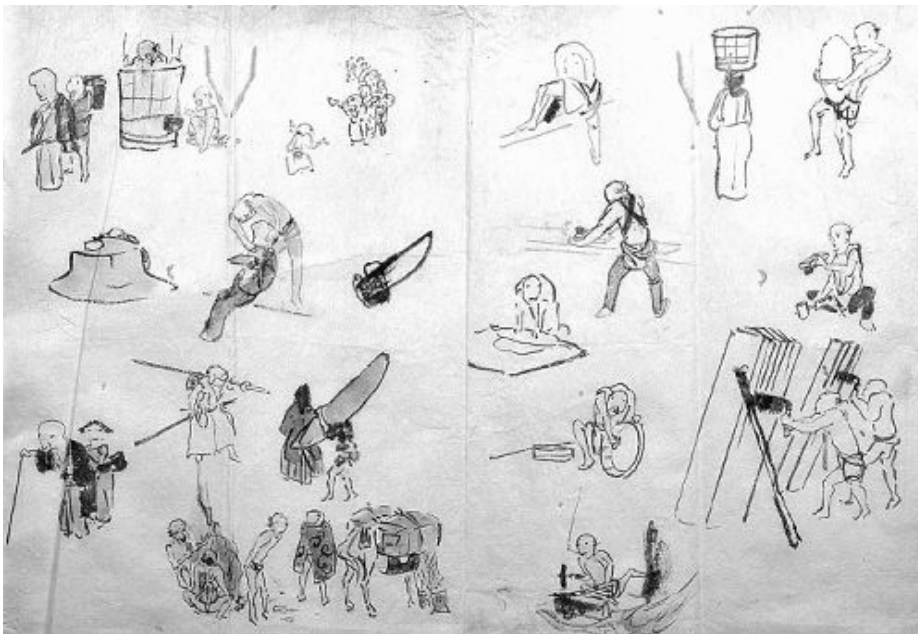
観察眼は人物にも広がり、絵は渡辺崋山の「一掃百態図」に似て、人々の営みの特徴を捉え、デフォルメしたものがほとんどである。崋山と深い交流があったため、このような絵を描いたとも考えられるが、両者の交流以前にも描いている。また、北斎漫画も手に入れている。これらも参考にしていると考えられるが、やはり、筆のタッチが違う。

人物画の基本は谷文晁から学んだといえよう。文晁や文晁の門人の描いた中国故事の画本が多数残り、それらを模写して練習を重ねている。その結果、掛幅装にした英龍の絵画には中国故事からとった人物像が多数残されている。しかし、それらとは別に、小さな紙の端切れに多くの観察した人物をデフォルメして描いている。

絵は、役所で働く人物ではあいさつをしている姿、お白洲で裁判をしている様子、英龍本人が植物の写生をしている姿と思われるものがある。英龍自身を描いたと思われるものも何点か見られる。

家人の日常を切り取ったものでは、以前紹介したあぐびをしている女性、針仕事をしている女性などのほか、読書をしている様子、夕涼み、将棋を指す大人・子ども・女性、その時々の人々の動きが活写されている。子どもの遊びもたくさん切り取って描いている。

野外での人々を描いたものも多く「天城山猟図」にも多くの人物が登場する。ほとんどは、猪、鹿を勢子（狩場で鳥獣を駆りたてる人夫）が追い出し、それを射止めようとしている姿であるが、他の紙片にも農兵と思われる人物が銃を携える姿が描かれている。なかには、どう見ても道ばた博打をやっているとしか思えないものなどもある。英龍の描く人物は、他者を鋭く観察し、同時に親が子どもたちを温かく見守るような優しさなど、一こま一こまどれを見てもその慈しみを感じることができる。



英龍が生活の中の一こまを切り取って描いたもの

砲術訓練の絵は、遠近法を利用していて、後方にいくと小さくなるように絵を描く前に線を入れ、そこに合わせて隊列を組んで大砲を撃ち放っている様子を描いている。記録としてとどめるつもりであったのであろう。写真が利用される前、西洋では報道のほか士気を鼓舞するために戦争画家の存在があった。日本でも、報道や記録のため、画家を伴う場合が多々あった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

英龍の師匠？ 画家 大国士豊

残された作品と記録 関わり示す

江川英龍の絵の師匠は大国士豊（1779～1844年）だといわれている。大国士豊は別号盛永、春斎ともいい、伊勢出身で、四条・円山派（土佐派）の画家である。幼少にして父を失うが、14歳の時、京都に出て御所画所土佐家に入学、一機軸をあみ、名声は周囲に聞こえ入門する者が多かったという。

その後、駿河、遠江、伊豆に遊学し、韮山代官江川太郎左衛門の弟子となったと、記すものもある。当時は禁じられていた鷹の私有が、駿河の府中に限り許されていたので、士豊は同所にとどまり、日夕鷹を写生した。真に迫った作品であったことから、人々は「鷹画」と称したともいう。英龍も鷹の絵をよく描いたが、英龍の画は羽の細部まで緻密に観察した結果を描いているので、士豊のものとは違う。

英龍は1835（天保6）年、代官に就任した。英龍の幼名を芳次郎、邦次郎といった。邦次郎を名乗っていた当時、「大国士豊帯之」との書き物があり、この当時から大国士豊が江川家に出入りしていたものと思われる。英龍は元服まで芳次郎を使い、のち邦次郎を名乗った。

年代が分かっている士豊の江川家への出入りは、英龍が江戸城へ登城する姿を描いてもらった40（天保11）年のものがあり、6月12日に画像料として金1両1分を支払っている。装束が他の肖像画と違い、また、装束だけの下絵も残され、代官として出仕する姿を描かせたものと思われる。士豊はこの時61歳になっていた。

士豊が画材を京都で購入して江川家に届けている記録もある。このことから、何らかの関わりがあったことは確かではなかろうか。絵の師匠については、谷文晁と併せて大国士豊もその一人であったともいわれ、反対に士豊が弟子であったともいわれるが、二人の年齢から考えられない。確実に英龍が士豊の弟子であったとは言いがたいのである。

また、立原杏所も英龍の師匠であったと書いた書籍もある。杏所が伊豆に来たこと、史料からやりとりがあったこともつかめるが、師弟関係を認めるものは発見できていない。

江川家に残された士豊の作品は、絹本「江川坦庵像」以外に、「蘭亭曲水図」「牡丹蝶雀図」「西王母図」「白梅図」があり、扇面が「梅鶯図」をはじめ6本、色紙2枚が残り、さらに未表装のものもある。扇子に桔梗をさらっと描いたところは、英龍が扇子に土筆を描いたものと通じるところがあるが、英龍の画法は士豊のそれと違った雰囲気をもっている。

大国士豊の墓は伊勢市内にあるという。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

大国士豊が描いた英龍像

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

15

谷麓谷・文晁親子と英毅・英龍の深い交流

絵画の世界生んだ師弟関係

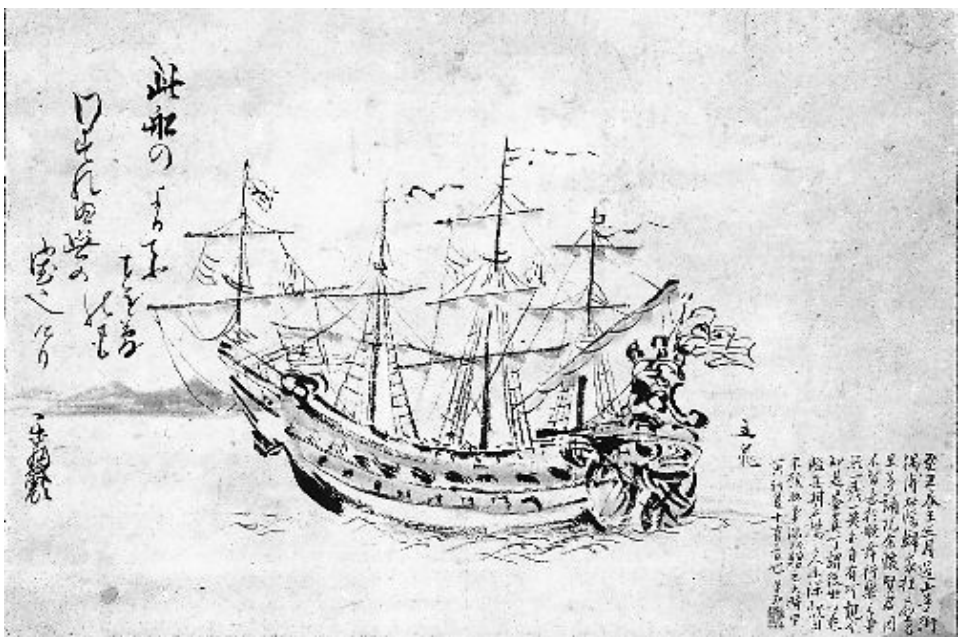
谷文晁が1800（寛政6）年に描いた「蛮船図」には、松平定信が讃（画面の余白に添え書かれた詩、歌、文）を入れ、それが江川家に残る。文晁は松平定信のお抱え絵師となり、定信が伊豆を巡見する時には、絵師として随行し『公余探勝図』を描いた。33（天保4）年71歳の時、江川家を訪れ、「天保癸巳初夏写以江川君清鑑」と「墨煙山水図」に記載している。

このほか、両者の関係を示すものとして、年号は分からないものの、「五月廿五日　韮山江雅君案下」「尊書　江川様　閏月念七日」「江川太郎左衛門様　四月初一日」「江川太郎左衛門様」と記された文晁書牘（書簡）が残る。ほかにも文晁の絵が多く保管されているとともに、「写山楼画本」と押印された粉本（模写）が30点と数多く残る。

文晁自身が中国の故事を模写したもの、文晁一門の画家が模写し江川家に贈ったものなどである。英龍の描いた絵も中国古画を模写したものが多く残り、英龍がこれらを手本にしていたことが想像できる。

年不詳の書状で「江川様」に宛てて「最早七十五歳眼力も気力も薄く相なり」と加齢による体力、気力が衰えている様子を吐露している。75歳だと37（天保8）年のことと思われ、英毅はすでに亡く、英龍が代官として活動を始めている時期である。

文晁とのつながりは、文晁の父親麓谷の代からである。麓谷は09（文化6）年9月に81歳で死去している。田安徳川家に仕えた父の跡を継いだが、世事を好まず、儒者の入江南溟に入門し儒学者となり、漢詩人でもあった。江川家に05（文化2）年作の漢詩「夏日」、翌06（文化3）年作の「自詠」が残る。晩年の作である。谷父子、江川英毅・英龍父子ともに深い交流で結ばれ、英龍の絵画の世界が生まれたものであろう。



谷文晁画、松平定信賛「蛮船図」

英龍は、江川家が麓谷以来の父子との付き合いの中で、文晁の画風を学んでいった。文晁は関東南画の大成者として知られるが、狩野派や円山四条派、土佐派、洋風画を学ぶなど、各画法に努めて一家をなした（サントリー美術館『生誕250周年谷文晁』あいさつ）。

さらに、幅広く題材を集めて描き、その画法も文晁同様、さまざまである。文晁の門人として記録されたものはないが、師弟関係に結ばれていたことを十分示唆するものである。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

16

英勝の代官罷免から36年後英征が韮山復帰

伊豆、相模、甲斐５万石を支配

江戸時代の伊豆が天領であったことは周知のことと思われる。天領＝韮山代官江川氏の一元支配、全て韮山代官の支配地であったと思っている人が多いと思う。しかし、実際に韮山代官の支配の村は少なく、江戸幕府創設期は韮山周辺の13カ村だけの支配で、当時は市川や諸星、河合などといった小代官が併立していた。

その中で、韮山代官を除いて徐々に小代官は淘汰され、１６４２（寛永19）年には三島代官支配地だけになり、三島代官は豆州代官とも呼ばれるようになった。

伊豆全体では８万６千石の土地があるが、幕末の韮山代官支配地は約１万２千石程で、残りのほとんどは譜代大名領か、旗本の支配地となっていた。しかし、これも天領の範囲の中での動きで、支配が代わる度に、代官が預かることになる。

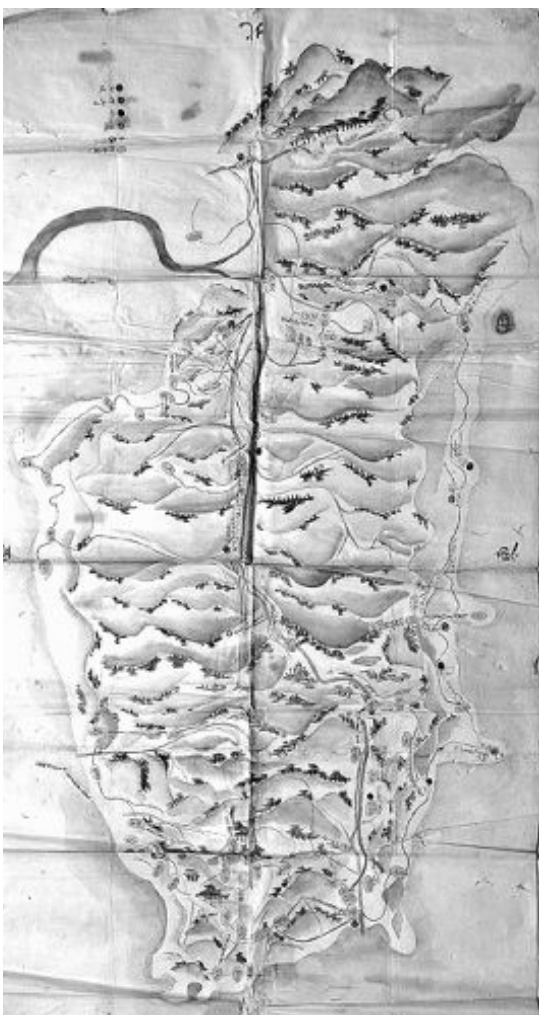
32代英勝は１７１９（享保４）年「代々職にあるのところ、先祖よりの負金上納滞納に及びしにより厳科に処せられるべき」ということであったが、このことは毎年返上納を続けることで許された。しかし23（同８）年、相模国にある花水橋および戸塚往還圦樋等修造のために手代の不正を監督しなかったという理由で罷免となった。韮山代官の地位は奪われたため、無役で韮山の屋敷に居住することとなった。

33代英彰は31（享保16）年に跡を継ぎ、韮山屋敷に居住していた。49（寛延２）年、江戸に出府して勘定役に任命されたので、韮山屋敷の取り片付けのため、帰国しようとしたとき、「希代の旧家であるので、取り払わず、留守居をおいて管理する」よう仰せ渡された。

50（同３）年５月代官に復し、本所三ツメに役宅をもらい、常陸・下総から下野・陸奥までの四万石を支配した。しかし、すでに31（享保16）～33（同18）年にかけて藤沢宿の６万石支配の代官となっていたという記録（『藤沢市史』）がある。58（宝暦８）年には韮山代官として復帰した。残念ながら、英彰は韮山の自宅へ戻ることなく死去した。

伊豆の天領は、それまで三島代官役所が中心になって治め、韮山役所は江川氏の罷免以来機能していなかった。江川氏の韮山復帰を機に、三島役所を出張陣屋として、江川氏韮山役所が伊豆国天領支配の要となった。

その跡を継いだのが英征である。実質的には59（宝暦９）年、英征が韮山代官に就任して韮山復帰となって伊豆、相模、甲斐５万石を支配した。その空白期間は代官頭伊奈半左衛門預かりとなっていた。韮山代官の支配地は前述のように少ないが、支配する村を点在させ、また、一村の一部を治めることによって、天領全体の管理が行き渡るような配置の仕方をとっていた。これにより、代官巡見、廻村等を行うことで、特に治安面の不安を解消していた。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



天明７年「伊豆国全図」

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

17

大慶直胤に師事 英龍、刀を鍛造

小駒胤長をお抱え工に取り立て

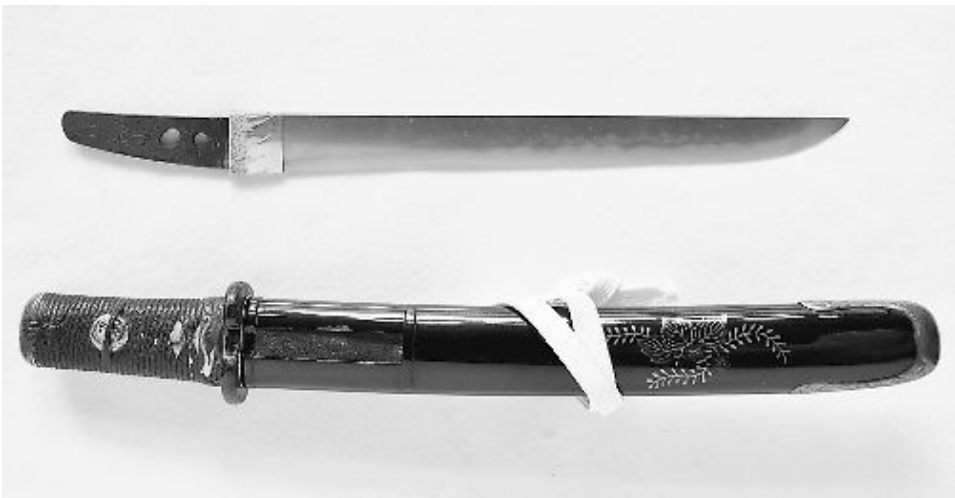
江川英龍は母・久から「忍」の一文字を与えられ、母が病床の枕元で「忍」の意味を言って諭した。恐らく英龍は次男で代官職を継ぐことはないと考え、英龍の花押「興」が示すように、何事にも興味を持って挑戦していたのではないかと思われる。それが後に、代官となり、国防を考える基礎をつくったと言えるだろう。武芸だけではなく書画、詩作をはじめ彫金、彫刻、作陶までこなした。

ちょうど、制作年の部分に穴が開いて年号を読み取ることができないが、「天保□年英龍作」の短刀が残されている。これとは別に、1831（天保2）年10月29日、31歳の時、初めて刀を鍛造し、銘を入れたことを記した文書がある。師匠は江戸で名工水心子正秀の流れをくむ大慶直胤（なおたね）で、弟子に小駒胤長（おごまたねなが）がいた。短刀の長さは総長34センチ、刃渡り25センチ、拵（こしらえ）え総長39センチである。

胤長は江戸時代末期の刀工といわれる。生年は不詳であるが、67（慶応3）年に没した。ただし、69（明治2）年の手代長屋の住人に小駒胤長の名前があるといい、没年については再検討の余地があるが、墓は江川家の菩提寺である韮山金谷の本立寺にあり、側面の碑文から67（慶応3）年12月3日に没したことが分かる。相模国黒須田村（現横浜市緑区）出身で、小駒宗太とも称した。

46（弘化3）年、直胤の推挙により英龍のお抱え工となり、韮山に居住したとされるが、英龍が代官になった翌36（天保7）年、すでに勝手方手代として江川家に居住していた。

英龍は代官になり、自分の役に立つ人物と見極めると家来や手代に取り立てた。胤長は手代として働くことはなく、鉄砲鍛冶としての役割を担ったものと思われる。勝手方であったので同年、英龍の奥方が熱海へ湯治に出かけた時、同行している。



英龍作の小刀

作風は板目肌の地鉄や互の目丁子乱れの刃文が目立ち、樋を掻いたものや無銘のものもみられる。模擬甲冑への試斬の結果などから、実戦での脆さを指摘する声もあるが、観賞用や居合に使用するには十分な刀である。江川家に抱えられた年に鍛えられた「小駒宗太平胤長造、弘化丙午冬、為小川為綏」銘の小柄（こづか）・笄（こうがい）・拵（こしらえ）付の短刀があったといわれる。この他、作刀は関東から伊豆・東海地方を中心に残っている。

胤長以外の門人として、直胤の養子荘司直勝、仙台藩士大友昌成、秋元藩士川部正次、松咲直宗がいた。当時日本橋の小網町に伊勢屋という鉄問屋があり、ここから仕入れていた。ちなみに、荘司直勝は上野（群馬県）館林藩士として、英龍の死去直後の55（安政2）年1月28日韮山塾に入門している。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

18

土豪的代官は払拭 吏僚への変容

江川氏も罷免、勘定奉行配下に

32代英勝の時代になると、世襲が慣例となっている土豪的代官は次々と払拭されていく。理由は、幕府の代官制度そのものにあったのであるが、幕府への年貢未進によるとされ、多くの代官は遠島、罷免、お家断絶という処分を受けた。

代官は年貢徴収官としての役割を持っていた。幕府が始まった段階では、災害があれば土地台帳にある通りの収穫を得て、確実に年貢を納めることは不可能に近い。しかし元禄期には、幕府は逼迫した財政難を切り抜けるため、金山の再開発はもちろん、新田開発、年貢徴収率を上げる、検地の仕直しを行い年貢地の増加を図るなどの政策を打ち出していた。代官に対しては、物成（収穫高）十分の一を認めるのではなく、手当として切米150俵渡しということで、確実に年貢が納入される仕組みを整えた。これにより、土豪的代官から吏僚としての代官に変わっていくことになる。

江川氏も同様の仕組みの中で、切米（俸禄）取りとなるが、それ以前の年貢米金の滞納はいかんともしがたいものがあった。

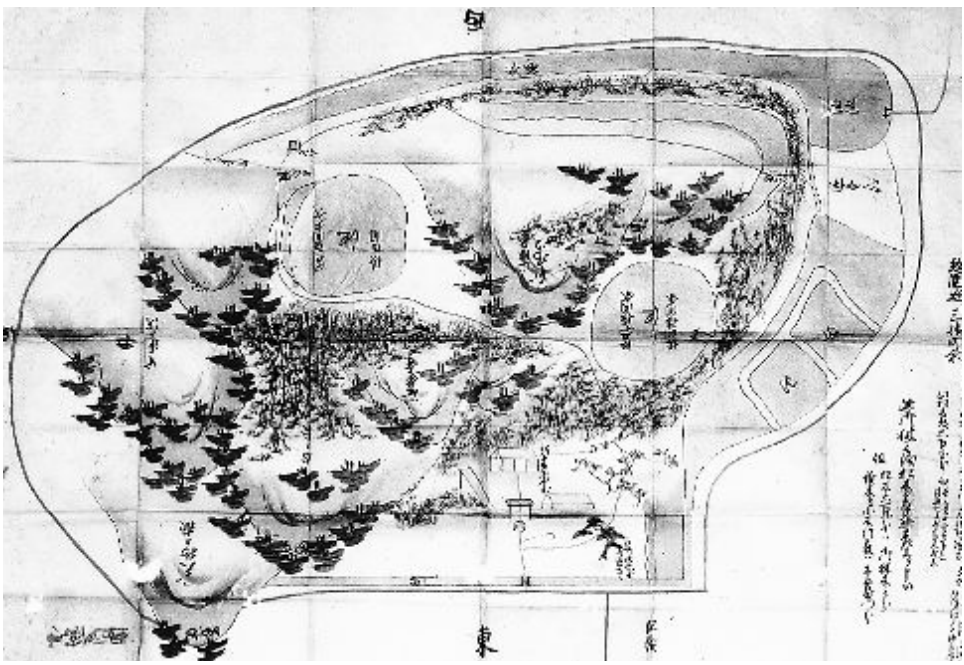
英勝は1719（享保4）年「代々職にあるのところ、先祖よりの負金上納滞納に及びしにより厳科に処せられるべき」ということであった。しかし「自分の会計は滞りなかりしかば、宥免ありて其沙汰に及ばざれば先祖よりの負金はいよいよ遅滞なく上納すべき」（『寛政重修諸家譜』）として許されるが、これは、1857（安政4）年まで、毎年返上納を続けることとなった。同年返済が完了したわけではない。江川英龍の功績により、英龍の子英敏の時、許されることとなった。

負金については許されたが、江川氏も他の代官同様、罷免の憂き目に遭う。23（享保8）年の罷免につながった事件についてはすでに述べたが、勤務等閑（なおざり）にしたという理由で罷免され、勘定奉行配下となった。他の代官に比べると軽い処分であった。

韮山代官の地位は奪われたため、無役で韮山の屋敷に居住することとなった。江川の支配地は後、三島代官としては1年だけの就任だが、罷免になった時から日野小左衛門が預かった。

この罷免時代、鎌倉時代より所持を続けてきた殿林、韮山城外堀跡の土地を埋め立てての新田畑開発を許され、23（享保8）年に着手する。これを御囲内と呼び、ここから入る小作料を含め返納していったが、のち江川家の財政も支えることとなる。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



江川家の財源となる享保期に描かれた御囲内絵図

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

19

日蓮直筆の棟札で守られた家屋

写しの所望者、引きも切らず

鎌倉時代、日蓮が伊豆の伊東へ流されていた時期に江川氏の家屋は建設され、1261（弘長元）年5月に日蓮直筆の棟札を賜ったとされる。そのお陰をもって、江川氏の住宅は地震や火災などの被害に遭ったことがないといわれている。この御利益のある棟札の写しを所望する人が引きも切らず、版画で刷って渡すことにした。1781（天明元）年「豪家に伝ハる鎮棟札写真護の棟札その影写を拝受して」俳人玄石が「梅のはな七字の髭の香をとめん」と詠んでいるのが、棟札配布の最も古い記録である。

江川家の家屋に関しては、この棟札が守っていたとされる。例えば12（正徳2）年、屋敷表門通りの百姓家から出火。1820（文政3）年には手代小屋から出火して御用達所および手代小屋を残らず焼失。40（天保11）年にも手代長屋から出火、4軒焼失して風向きにより屋敷へ火が移ろうとする時、風向きが変わり難を逃れた。鎮火後に風は元の向きに戻った。屋根の上に異霊が立ち現れ消火していたという。

72（明治5）年には手代長屋から出火して、やはり主屋（おもや）へ燃え移る寸前であった。これに天保からこの間にも申年10月20日、家来の過失で庭内物置小屋から出火した。この時も異霊が立ち現れたという。このように、家屋は日蓮の家作棟札に災厄から守られ続けていたが、江川家としても存続の危機を何度かくぐり抜け、現在に至っている。

17（文化14）年に江川住宅の大修復を行った。8月28日に修復が完了した時、35代英毅は棟札を棟札箱に納めたと記録されている。現在の住宅は民家第1号として1958（昭和33）年に重要文化財の指定を受け、解体修理を行ったものである。

1832（天保3）年3月30日、浜奉行木村喜繁が伊豆薬園御用の巡見として、韮山代官江川氏を訪問し『伊豆紀行』に「庭もよほど広く、たぶん池にて蓮の一円生じ居たり。残らず白蓮にて、往古より蓮池の由、盛りには見事なりらんと思ひぬ。（略）太郎左衛門の家作は、至って古き昔の普請の由、その内にも台所は殊さら往古の柱立ちのままの由、槻にてあるらん、根張りの有るを、そのままに使ひたるも有り。よほど広く、この棟に日蓮上人自筆の棟札ある由、火難除けの由、上覆ひを紙にて包みあり。定めて本書は納めありて、その印ばかりと見ゆ。信心の輩は、その写しを願ひければ、頂かせる由、召し連れたる者の内にも、宗旨の者は請ひたる由」とある。また、日蓮の棟札以来火難なしとの伝説は『甲子夜話』に林子平の談話として掲載している。

49（嘉永2）年に版木を改版し、幕府に家作棟札写を1枚につき題目100遍ずつ唱え、550枚献上し銀2枚拝領した。しかし、伝来の紀律に背くとして銀を返上している。家作棟札は多くの人の求めに応じたが1日7人までと決められた。大正～昭和初期の授与名簿が残され、関東大震災でも信仰のお蔭で災難に遭わなかったと、お礼に江川家を訪れた人がいるほどである。江川家には家作棟札の他に不老不死曼荼羅も残る。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

明治33年の日蓮上人家作棟札所望帳

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

20

内庭に生える真竹 多くの茶人 珍重

千利休、重文の花入「園城寺」制作

東京国立博物館には1590（天正18）年、豊臣秀吉の小田原攻めのとき、千利休が作ったとされる韮山竹製の「園城寺」といわれる竹花入れが収蔵され、重要文化財に指定されている。千利休は豊臣秀吉に従い、熱海にいて、江川家を訪問、その時、邸内の割れ目のある竹を三井寺の割れ鐘に見立て「園城寺」と名付け、その子少庵に贈った。

前回紹介した、1832（天保3）年浜奉行木村喜繁の『伊豆紀行』に「この構への内に、よき竹藪の有りて、花活などに伐りて、世に珍重する由、兼ねて承りける故、尋ねたるに、一躰の節合も伸びて、よろしき竹にて以前より所々へ懇望に任せ、伐りては遣しけるが、今は藪、殊の外おとろへ、竹も至って細く、数少なになりける故、3、4年以前より懇望の者へも断り、竹1本も伐らぬ由、この上、4、5年も経ちなば、藪も直るべき由、構の内、所々に竹藪も有るなれど、外の藪は一通りの竹の由、その外、この辺竹の多き所にて、百姓構へなどもすべて竹を割り、網代とかいふものに組み、垣根をなしたり」とある。

33代英征は俳句を好んだ風流人であったが、そればかりではなく、茶の湯にも親しんだ。千利休が花入れにした韮山竹で自らも花入れを作った。表千家は4代目から代々千宗左を名乗り、表千家の始祖となるが、おそらく8代目の宗佐（1744～1808）と交流を持ったものと思われ、彼の制作した花入れも残されている。

江川邸の内庭に生育する真竹のうち、何本かの割合で割れ目の入った竹が生える。不思議なことに、成育中に割れ、その割れ目は中まで達していない。この竹は、茶人たちに珍重され、多くの人たちが求めた。

1821（文政4）年「韮山竹差遣候名前帳」に、例えば同年には、下田町の廻船問屋綿屋吉兵衛を通じて大坂天満乾物問屋大根屋小兵衛など4人に渡し、24（同7年）8月には沼津藩士吉田甚兵衛が、地方代官を勤める北江間村石井清次郎を通じて求めることがあったり、同閏（うるう）8月には棟札参詣に訪れ、そのついでに求めて行ったりしている。

同資料に記載された所望者は21年には4人4本、22年には14人18本、23年には29人32本、24年には14人18本、16人22本、25年には13人14本、26年には3人4本、27年では9人14本、28年では9人9本など32（天保3）年までの所望者と本数を書き上げている。代官羽倉外記など、毎年求めに来ている者もある。

32（天保3）年10月4日、徳川家御三卿のうちの田安家から所望があり、「韮山」の焼き印をして琉球包みで田安家御用人見習いを通じて渡している。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

千宗左・江川英征作による韮山竹の花活け

川路聖謨ら280人 学んだ〝韮山塾〟

英龍が高島流砲術を伝達、教授

1月16日は英龍160年忌にあたる。英龍は、代官役所手代の柏木忠俊らを長崎に派遣して高島秋帆に入門させ、間接的には門人(門下生)になっていた。

1841(天保12)年4月、幕府勘定所へ高島砲術入門の願いを出していたが、徳丸原の演習以後、7月に英龍へ一人伝授の命が下った。英龍は、秋帆に免許皆伝を許されると、42(同13)年より高島流砲術の伝達、教授を開始した。同年12月16日、勤務勉励のお褒めの言葉により五位となる布衣に昇格した。43(同14年)5月18日、禄高700俵に加増され、その日に砲術師範役の兼任を命じられた。

韮山塾の最初の門人になったのは松代藩(長野県)士・佐久間象山で43(天保14)年2月6日、1日遅れで勘定奉行川路聖謨が入門した。江川家は「川路左衛門尉聖謨が第一番入門者」としている。この時から英龍が亡くなる55(安政2)年正月までの間、英龍から直接、およそ280人が学んでいる。

松代藩主真田幸貫が老中兼任で海防掛に任ぜられたことから、幸貫は洋学研究の担当者として佐久間象山を任命、象山は幸貫の推挙を受け、英龍の門を叩いた。しかし、英龍の教育方針と象山の学習方法に相い容れないものがあり、「免許皆伝」に至らなかった。松代藩からは老中金児忠兵衛を送り出すなど、英龍から貪欲に知識を引き出そうとしていた。

韮山塾というのは正式な名称ではなく、塾生たちが便宜上このように呼んでいた史料が残されていることと、地元旧名主宅に残された『韮山塾日記』があり、ここから通称「韮山塾」としている。

韮山塾法があり、江川文庫に伝来するものには年記がないが、地元旧名主方に同文言のものが伝わり『韮山塾日記』として残されている。これには、戊申(1847=弘化4年)の年記がある。

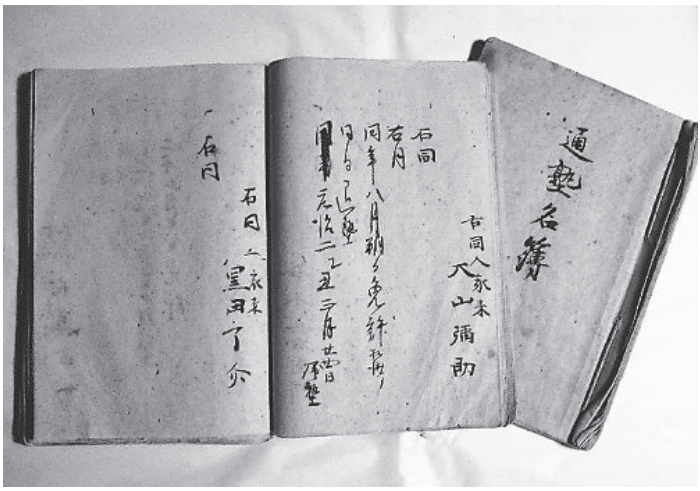
塾法には第一に高島流砲術伝授の誓詞を順守することはもちろん、「敬慎」を常に心掛けることをあげ、10カ条に渡り書き上げられている。塾法では高島流砲術の伝授心掛けを説き、実地訓練の場である山猟ばかりではなく日頃の生活の在り方も統制している。英龍自身が厳しく生活していたこともあるが、こうしなければ、大勢集まってくる門人へ対処できなかったのである。

この時期、幕府から離れ、多くの門人を教育することで、いつか日本のために役立つ人材が育つという信念が、英龍の主催する山猟にはみえる。また、このころが韮山での塾の発展期とも考えられ、大砲の試射なども盛んに行っている。

門人は、幕府の親藩、旗本ばかりではなく、西南雄藩からも取っている。55(安政2)年2月に草稿した「学問所規則覚書」の宛所が老中阿部正弘になっており、その中に、朝四つ時からの講義を聴講できる者の資格として、「御目見以上以下・陪臣・浪人・百姓・町人に至るまで聴聞勝手次第」としている。

46(嘉永2)年に英龍が農兵建議で述べている「百姓町人の武芸は御触れで禁止されているが、韮山屋敷近辺の農民を選び農兵を組織したい」ということと、すでに英龍は死去しているが、その直後に著されている「学問所規則覚書」と通じるところがあり、彼の目指した教育は、英龍が没してなお、精神が引き継がれていると考えられる。

(江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之)



陸軍大臣大山巌、総理大臣黒田清隆が記載された門人帳

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

22

作陶、作刀、木工…英龍、倹約で多才に？

引き継がれた〝無駄を嫌う〟精神

代官江川英毅の時、江戸役所詰書役で、子・英龍に代官が引き継がれた時に手代となった根本定助が、「私永之御暇奉願候ニ付、存寄之儀申上候書付」として、「余り厳重の御取計ニ迫り恐怖いたし、難有御趣意忘却仕…夜分は囲炉裏之焚火而已ニ而燈も無之、余り甚敷御吝嗇ニ当り、…」として、手代辞表を出している。

内容は、英龍の代になったら、あまりにも厳しい倹約で、夜は囲炉裏のたき火のみを灯りとし「あまりにもケチで、永のおいとまをもらいたい」というものである。

根本定助は、郡内騒動における村役人、郡中惣代、郷宿の評価を記載した「箇条風聞書上帳」を、1838（天保9）年8月に江川英龍に提出するなど、手代として重要な位置を占めていた人物である。

これほどまでにしなければ、家政の立て直しができなかったと言わざるを得ない。家の中を切り盛りする台所の女中も半分にした。しかし代官英龍は、手代・手付など家来に命令しただけでなく、自分自身も厳しく律していた。

福沢諭吉は『福翁自伝』に「江川太郎左衛門と云ふ人は近世の英雄で、寒中袷一枚着ている」という話を兄から聞いて「私は誰にも相談せずに、毎晩掻巻一枚着て敷蒲団も敷かず畳の上に寝ることを始めた」「一冬通したことがあるが、是れも15、16歳の頃、唯人に負けぬ気で遣ったので、身体も丈夫であったと思われる」と書いている。

英龍の使用した充て継ぎだらけの着衣が残されている。その継ぎ充て布で、かえって暖かいのではないかと思われるほどのものである。

英龍は吝嗇であったためにいろいろな物を作ったと思われるほど、才能に長けていた。すでにその紹介は終えていると思うが、作陶、作刀、木工、彫金、書画、詩作などほとんどあらゆる分野にわたって一流であった。

英龍が制作したという「韮山」と書かれた皿が2枚残る。このうちの1枚は割れているが、焼き継を行って利用していた。この皿は50（嘉永3）年に八田兵助が梨本に陶器窯があることを報告したので、この粘土を使って自分で試したものであろう。

全てのものを無駄にしない、という精神が江川家に引き継がれた。お陰で私たちは、捨てられる危機を脱した資料群と向き合うことができ、その数は7万点を超える。今後、国民共有の財産として、多くの研究者に利用していただき、資料群の価値を高めていってほしいと切に願うものである。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

焼き継のある英龍作陶の皿

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

23

釜鳴屋平七も入った韮山役所の牢

罪科示す捕縛方法、人形で見本

韮山代官役所に付随して牢（囚獄）があった。韮山屋敷表門より南へ300㍍ほどの金谷西側の山付の日当たりの悪い場所である。ここに、熱海で義人といわれた釜鳴屋平七も閉じ込められた。

平七は、熱海村鮪網漁業権をめぐって「網元の身分でありながら漁民の立場を考えて」韮山代官役所へ門訴した漁民一揆の指導者である。平七の本職は魚商といわれる。

1859（安政6）年11月13日、平七の唱導により、蓑笠で身を固めた214人が従来の鮪網漁から浜方の生活を守ろうと根拵網（大型の定置網）を始めた。江戸肴問屋と結び、伊豆山権現般若院を後ろ盾にして鮪網の独占を図り、従来の漁業権を主張する地方と呼ばれる網元に対して、網子たちが韮山役所へ強訴した。

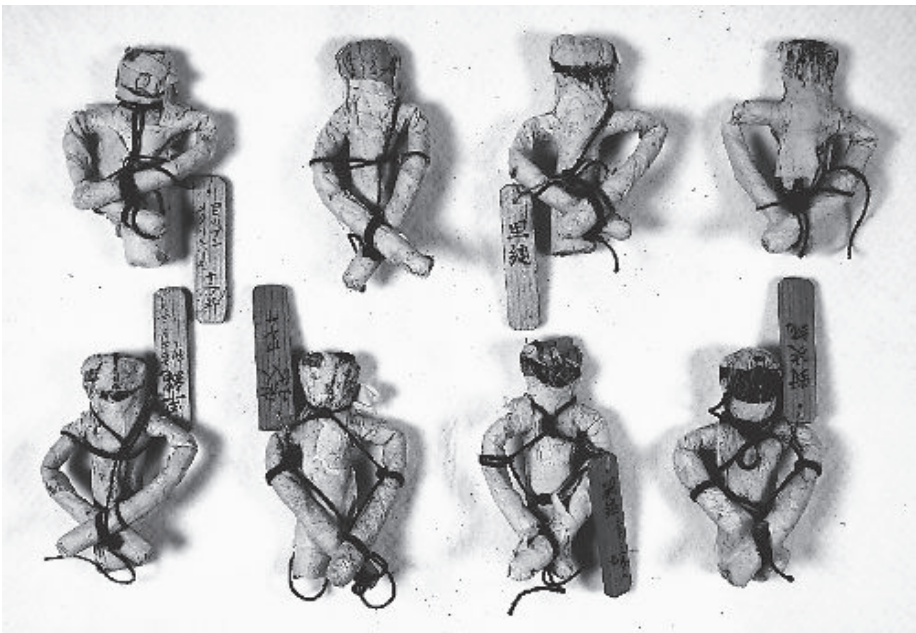
平七は5年間の韮山での入牢生活の後、島送りとなり、八丈島へ送られる途中、63（文久3）年11月4日、乗り継ぎの大島で死亡した。34歳であった。韮山牢内にいた60（万延元）年閏3月20日の容体書によると、入牢中、医師慎庵の見立てで、総身に腫瘍が見られ、熱があり食欲不振、危うい状態になったので施薬を行った。

江戸時代の牢は、伝馬町牢屋敷に代表されるように、容疑者の拘置所・未決拘禁所の性格が強く、既決監獄の役割を持つ現在の刑務所とは異なる。日当たりの悪い、2畝ほどの湿気の多い場所のため、吟味が長引く長期入牢者には病気、牢死も発生した。韮山役所にはお抱えの医師肥田春庵らがおり、牢人の容体書が多く残されている。

百敲などの軽い刑は、その場で執行されることもあった。多くは牢前で行われ、打ち首・火刑といった死罪は、三島刑場（新幹線三島駅付近）で執行された。

他方、犯罪者を捕らえ、捕縛して役所へ連行、または入牢となって吟味を受けることになる。吟味を受ける段階で、どのような罪を負ったか分かるように、それぞれの罪科によって捕縛の仕方が違うことが判明した。これを、役所として分かりやすくするため、人形で示している。

韮山役所は、後に韮山県庁、君沢田方郡役所として三島へ移転したので、江川邸の北側にその位置を留めるのみとなっている。手代であった前田甲龍は、60年4月に行われたお白洲取調の様子を図に描いている。小砂利が敷かれたお白州で、罪人は捕縛され、後ろに腰縄をとる番非人が控え、手代秋山粂蔵が罪人の横に座り、裁判を担当する公事方の前で吟味を受けている。



逮捕、白洲へ出る罪人の捕縛の見本（罪科によって違う）

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

24

農兵組織を発足 下田警備に当てる

スペンサー銃、野戦砲など近代装備

1849（嘉永2）年英国船入津によって下田警備の指揮を命じられた英龍は、農兵を採用して警備に当てることを勘定所宛てに建議している。幕府の直轄地では農兵を組織することができなかったので、それは簡単には採用されなかった。

下田警衛には沼津藩や小田原藩が組織した農兵があたっていた。しかし小田原、沼津とも下田からは遠く、問題が発生してもすぐに駆け付け警衛することはできない。今回も英龍がすぐに駆け付けたわけで、百姓、町人が武芸を身に付けることは不可能であることは承知の上、韮山屋敷最寄り支配所の村々から人物確かな百姓を選び、砲術、武術を稽古させ、緊急の場合は集合させたいというものであった。

韮山役所常備農兵の発足が分かるものとしては、63（文久3）年11月に多田村（伊豆の国市）において「農兵日記簿万帳」があり、村内農兵人の取り決めが行われたことから、この時からと見られる。11月22日には沼津農兵300人ほどが下田へ出掛けているが、その時、韮山農兵も出動している。

村々へ触れ出し、農兵の募集、国恩金の差し出しを呼び掛けた。例えば伊豆半島最南端にある下流（たる）村（南伊豆町）の農民5人は農兵を差し出すことが困難なので、農兵稽古場の建設、その他どのようなものに使っても良いとして、国恩金15両を出している。湯ケ島村（伊豆市）からは農兵に応じ、さらに国恩金20両を差し出している。三島宿年寄は「農兵取立厚き御趣意」として、自分の子を含め2人を出すことを願い出ている。

英龍画「農兵調練の図」

韮山農兵は、豪農層の次・三男を中心に構成され、その村方からの拠出金によって運営された。他には類例がみられない、米国から輸入したスペンサー銃や野戦砲などを装備した近代的な農兵であった。

このようにして組織された農兵は韮山役所に泊まり、65（慶応元）年には農兵の学校が作られた。近代的な軍隊としてできあがっていった。ここでは、常時40～50人が寝泊まりする宿舎兼校舎を建設し、士農混在して学習する体制が整えられた。また、学校では天城・江梨山へ山猟に出掛けるなど実践の教育はもちろん、学校建設に向けての準備で楠公の絵本30冊の購入など、思想教育も充実させていた。

農兵は武士として扱われることになり、喜んで参加したと見られているが、必ずしもそうとはいいきれないものもあった。田京村（伊豆の国市）は小田原藩と相給（あいきゅう）（複数領主の割り当て）で韮山代官所は家数が4軒で男の人数は19人しかいなかった。そこへ、韮山代官所の住民ということで63（文久3）年12月、農兵取立の命令が下った。しかし、これら19人は全員病気か他出して稼ぎを行っている者たちなので、農兵に取り立てないでほしいと願い出ている。

このような例はあるものの、ほとんどの支配地村々は国を守るためという大きな理念を持ち、喜んで参加していた。（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

25

英龍 西洋砲術の師 高島秋帆

蟄居後、江戸屋敷へ迎え入れる

1808(文化5)年、長崎で英国艦フェートン号によって起こされた軍艦侵入事件の当時、砲術家・高島秋帆の父四郎兵衛は出島で大筒を抱えていたという記録があり、高島家は緊急時、出島を防衛する役割を担っていた。

23(文政8)年には、秋帆は高島四郎太夫の名前でオランダへモルチール砲一式を注文、32(天保3)年以降、順次長崎に到着した。秋帆は、32年から36年頃にかけて、オランダから大小の銃砲類を輸入し発射訓練を行い、34年には小銃による生兵教練、銃陣研究にも着手している。

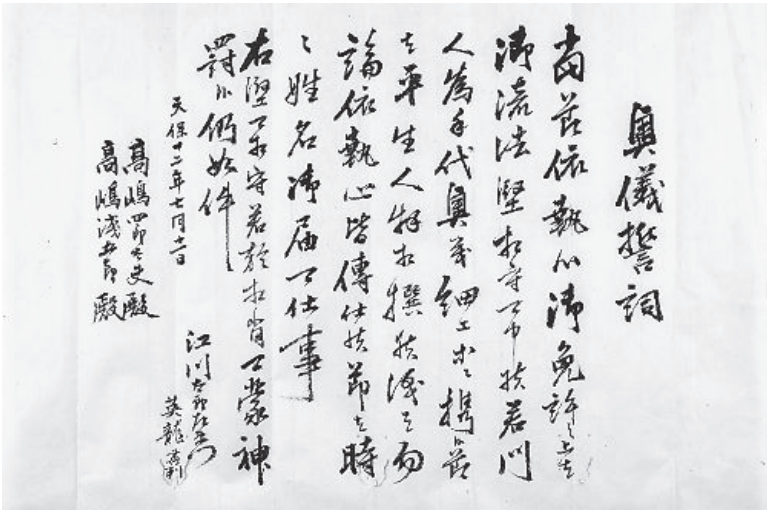
最初の伝授者は九州に限られた。肥前佐賀藩武雄鍋島家が、32年に入門したのが一番早く、34、35年頃には、荻野流および高島流を伝授するとともに、モルチール砲を一門納めた。

幡崎鼎(蘭学者)が37(天保8)年水戸藩の命令で長崎へ向かう時、英龍は幡崎に「高島氏・久松氏への門下になりたいと考えているので、(長崎へ行ったら)よくよく話をしてほしい」と手紙を書いている。この頃、すでに高島流の伝授が行われているという情報を得ていたのである。

40(天保11)年アヘン戦争の勃発、清国が英国の軍事力に屈したという報に接した高島秋帆は、幕府に天保上書を提出して西洋砲術の採用を進言した。老中水野忠邦は、それを受けて江戸徳丸原(東京都板橋区高島平)で演習を実施するよう命じた。

41(同12)年5月9日、高島秋帆・浅五郎父子の指導のもと、砲隊24名、銃隊99名による大規模な演習が行われた。演習は誰でも見学できることになっていたので、手代柏木忠俊以下9名の韮山代官関係者も見学している。

この日の演習では、モルチール砲、ホーイッスル砲、野戦砲の実射、銃隊による陣形がえ、突撃、斉射などが披露された。徳丸原の演習が成功裡に終わり、幕府鉄砲方井上左太夫などから否定的な意見があったものの、幕府は直ちに秋帆から大砲を買い上げ、かつ西洋砲術の伝授を旗本1名に限り行うことを決定した。



高島流砲術免許皆伝の奥義誓詞控え

演習以前、すでに4月に幕府勘定所へ高島砲術入門の願いを出していたが、7月英龍へ1人伝授の命が下った。当時、同様に下曽根金三郎が願い出ており、1人のところ、下曽根と2人へ伝授許可が下りた。

英龍は、40(天保11)年7月11日、高島流大砲秘事を守るべき旨の起請文を高島秋帆に提出、翌41(同12)年7月11日免許皆伝の奥義誓詞を秋帆に宛て、同月17日高島流砲術皆伝届けを勘定所へ提出した。英龍はかねて西洋砲術による国防を構想していたので、高島流砲術を普及するために、韮山の私邸に塾を開設した。

同年10月、鳥居耀蔵が、重用される秋帆を陥れようと「密貿易をしている」と虚偽の訴えをした長崎事件によって罪を受け、武蔵国榛沢郡にある岡部藩(埼玉県深谷市)阿部信寶に永預けとなった。高島秋帆の蟄居は、英龍にとって師弟の間柄なので、その嘆きぶりは大きかった。

また秋帆の高齢を気遣って、自分の江戸屋敷にて蟄居させるよう何度も懇願した。なかなか聞き入れてもらえなかったが、再三の願いが叶って、ようやく許可を得た。屋敷内に部屋を作って、秋帆夫妻を迎え入れることができ、面倒を見ることとなった。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

軍事技術の導入目指し 幡崎鼎に蘭学師事

幕府が英龍に砲兵書翻訳を依頼

幕府はすでに1808（文化5）年、長崎通詞6人に商館長ヅーフよりフランス語を学ばせ、09（同6）年にはオランダ通詞にロシア語、英語を学ばせている。幕府は日本沿岸に来航する欧米諸国の船舶に対しての対策を考えていた。しかし、正式なルートを考えるとオランダ語の翻訳により西洋の学問を知ることが一番早い方法であった。

34（天保5）年は英龍が代官に就任する前年で、この年、英龍は宇田川榕庵訳「和蘭薬鏡」＝29（文政2）年開刻（木版をおこす）の医術書＝と「名物考（江戸中期の百科事典）」を購入している。

英龍の蘭学における最初の師は幡崎鼎である。斎藤弥九郎の紹介で交流が始まった。37（天保8）年3月6日、幡崎は水戸藩の藩命で長崎へ向かう途中、箱根から英龍に宛て手紙を書いている。

英龍は三島宿で幡崎に会いたいと思ったが、会う機会を逸してすぐ翌日、返書をしたためた。そのなかで、高島（秋帆、もしくは長男の浅五郎）氏、久松（次男の土岐太郎）氏の門下になりたいとのことと、ともに、オランダ軍学書を調べたいので世話をしてほしい、また、一昨年オランダで戦争に使った鉄砲、猟に用いた鉄砲、シケナイキュンテ（原文）という銃をあつらえおいたが、その後どうなったか教えてほしいと記している。すでに、蘭学による軍事技術の導入を考えていた。

ペリーの浦賀来航の翌54（嘉永7）年4月18日、『銃創瑣言』の翻訳が終わり、出板（印刷）の許可申請を行った。7月10日になると「願いの通り鉄砲疵治療書開板（製版）苦しからず」として許可が下り、同年8月に刊行された。この書物は、大槻俊斎が翻訳し、英龍が序文を書いている。

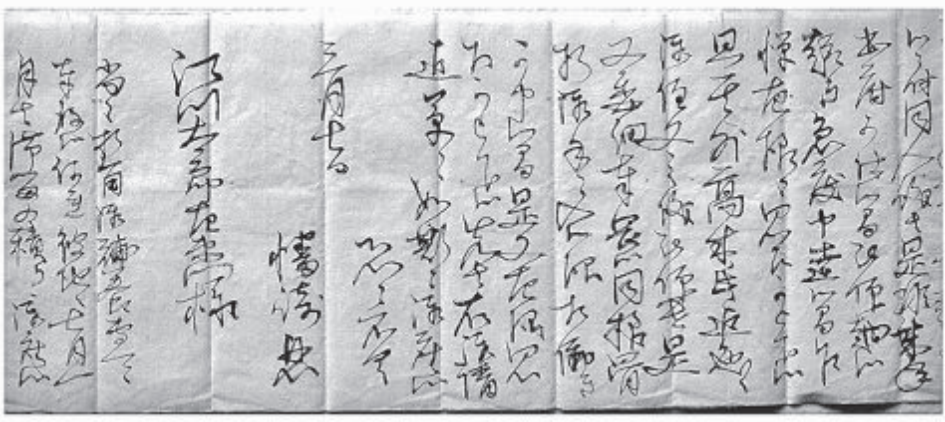
また『銃創瑣言』の翻訳許可が下りた翌閏7月5日付覚で、英龍に宛てて「ベウセル著、アルチレリー・ドールマン著砲術書・兵卒守衛の書を早々和解致し差し出すべき旨」の仰せを蒙った。幕府も矢継ぎ早に翻訳書が欲しかったことと、すでに英龍を中心とした翻訳の実績が買われたのである。

これにより同月8日、蘭書が江川家に下賜された。蘭書は、トールマン著「砲術書」「和蘭本国鉄の論」、ハンフーイ著「銅製石火矢鋳立之書」、ハルテン著「城郭攻守の書」、ハンアスペレン著「軍中番所建方の書」「兵卒守衛の書」、ヒュギュエニン著「躍射説」、テッサック著「歩卒大将手引の書」「マーリン字書」「マルチン字書」「軽隊軍令の書」、ネッテン著「諸種の小銃刀剣の説」である。この中に「砲術書」「兵卒守衛の書」ともに含まれている。

現在、これらの中で残っているものはないが、命令によるもの、その他さまざまな方法で入手した砲兵書を翻訳した。

英龍は『県令集覧』によると54年、他の史料では53年に勘定吟味役格に任命されたとなっている。海防方手代に中浜（ジョン）万次郎、高島喜平（秋帆）が置かれていた。そして、海防論を具現化できるのは幕府内では英龍をおいていなかった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）



蘭学の師である幡崎鼎よりの書状

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

27

佐久間象山ら松代藩 37人江川氏の塾へ

多数の蘭書翻訳、進む軍事研究

1850（嘉永3）年、松代藩家老金児忠兵衛が英龍宛てに蘭書の照会を行っている。佐久間象山の入門をはじめ、松代藩は藩主真田幸貫が、老中兼海防掛に任ぜられたことをきっかけに、金児忠兵衛を通じて、開明的で時代を先取りしていた江川との関係を深めようとしていた。韮山塾をはじめ江川氏の塾に37人を送り込んだ。特に42（天保13）年9月には佐久間象山、金児忠兵衛をはじめ13人が韮山塾の門をたたいた。

英龍のもとで翻訳を行った1人と思われる友成英之助は、年不詳2月29日付書状で、植村左近献上の筒（大砲）製造の方法は、何の書によるか調査を行うとし、同日付覚で、長ボンベ・山カノンはスチーイルチース書、短カノンはコンストリクチー書によって調査を行うことが記されている。

蘭書の翻訳で英龍のもとで尽力したのは石井修三と矢田部郷雲である。矢田部は大砲の設計図も作成し、英龍に大きく力添えをした。矢田部の名前は44（天保15）年冬の「勝手方給金請取帳」から見える。当時、年俸金12両という破格の支払いをした。それだけ翻訳、設計図の作成と期待された人物であった。

代官としての江川家の手付・手代には名前が載ってこないことから、終止勝手方手代として私的に雇われていたものと考えられる。ちなみに、「勝手方給金請取帳」は47（弘化4）年までの記載があり、その年までは確実に彼の名前を見ることができ、45（同2）年の角打、山猟にも参加している。

このような中で翻訳が進み、英龍が入手した翻訳蘭書情報は「古今西洋兵書翻訳類目録」が残り、41種の図書が書き上げられている。このうち現在、江川文庫に残されているものは10冊であるが、翻訳書写段階で書名が変わったものもあると思われる。当時記録したものとほとんど変わらない内容で、異書名の翻訳本が何冊か残されている。

筆写されたドゥーフ・ハルマ（ハルマ和解）

入手した目録内に下札を付け、「分らなければ無益」と注記している。内容を熟知し、どのようにこれら蘭書を生かしていこうか十分な検討を行っていたことが垣間見られる。

英龍没後を引き継いだ英敏時代の57（安政4）年の「県令集覧」を見ると、鉄砲方付手代の中の蘭書翻訳方に安井畑蔵、鈴藤勇次郎の名前がある。鈴藤は60（万延元）年、咸臨丸で米国に渡り、その時の様子を絵にしたことで知られている。

鉄砲方教示に森田貞吉、中浜（ジョン）万次郎、岩嶋源八郎、長沢剛吉ら13名が記載されている。そのうち安井畑蔵は蘭書翻訳方と教示方と兼ねている。さらに後に軍艦操練として鈴藤勇次郎、安井畑蔵、松岡盤吉、肥田浜五郎の名前が記される。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

大地震津波で被災 露ディアナ号を救済

英龍、戸田で代替船の建造指揮

1854（嘉永7＝安政元）年11月4日、いわゆる安政の東海大地震が東海地方を襲い、沿岸部は津波の被害にのみ込まれた。下田も大津波によって大きな被害を被った。下田町では流失皆潰（全壊）821、半潰（半壊）水入り30、死者122人に及び、無事4軒という状況であった。折しも日露和親条約締結交渉のため、下田港に停泊中の提督プチャーチン率いるディアナ号は大きな損壊を受けた。

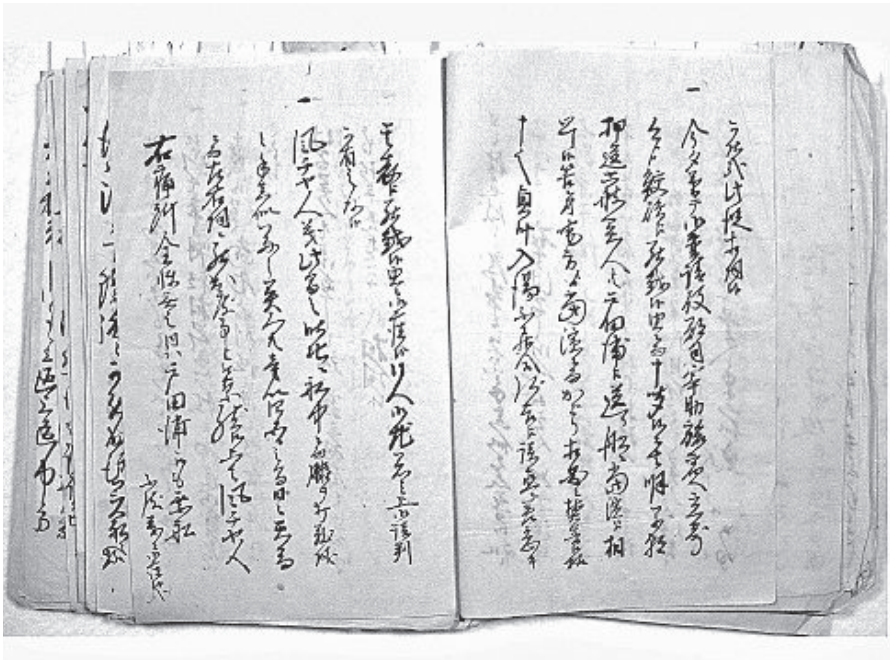
英龍は11月18日に下田へ到着し、日露和親条約交渉を引き受け、下田に滞在中の川路聖謨（かわじ・としあきら）と救済、善後策の協議を行った。

ロシアとしては53年から始まったクリミア戦争のため、他国に知られず同艦の修理をする場所を幕府に依頼した。下田から最も近く、廻船の船溜まりとなってはいたが、太平洋に面さず、外国船が入港することは想定されない、また陸路でも隔絶された戸田村（沼津市）の地が選ばれた。

当初、補修をして帰国する予定で戸田までの曳航（えい）を12月26日に開始した。ところが、冬の伊豆西海岸では特有の強い西風といった悪天候で、「駿河国富士郡宮島村沖50間余（富士川河口付近）」で座礁してしまった。

近隣の村々から約500艘の漁船を出して座礁船を動かそうとしたがかなわず、乗組員救助に切り替え、29日これら漁船や漁民によって全員救出された。

宮島村に急行した英龍は、川路に対して座礁、救出の様子、食料、小屋掛けの処置、明朝プチャーチンと会見して戸田への移送方法について決める旨の書状を送っている。その後、船は利用できないので戸田へは陸路で向かった。



ディアナ号の代船「ヘダ号」建造の経緯を記す「ヘダ号一件書留」。「風チヤ人（プチャーチン）」の表記が見られる

ディアナ号修復が不可能になってしまったので、結局、ロシア本国との連絡船を建造することとなった。その指揮を依頼された韮山代官英龍は、12月6日韮山を出立、11日に帰着した。英龍死去のおよそ一カ月前である。

戸田でその方針を定め、ディアナ号に乗船していた造船技術者の設計指導により、戸田村の船大工・上田寅吉、緒明嘉吉、石原藤蔵、堤藤吉、佐山太郎兵衛、鈴木七助、渡辺金右衛門の7人を世話係とし、100人余の船大工を伊豆近郷と御前崎、相良、焼津、清水、沼津などから総動員した。

2本マスト・100トンの洋式帆船2隻を100日で建造、という指令のもと、およそ3カ月半かけて造った。長さ24メートル、幅7メートル、深さ3メートルの大きさで、1隻はロシアへの帰国用、もう1隻は江戸幕府から依頼された。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

29

完成したヘダ号でプチャーチンら帰国

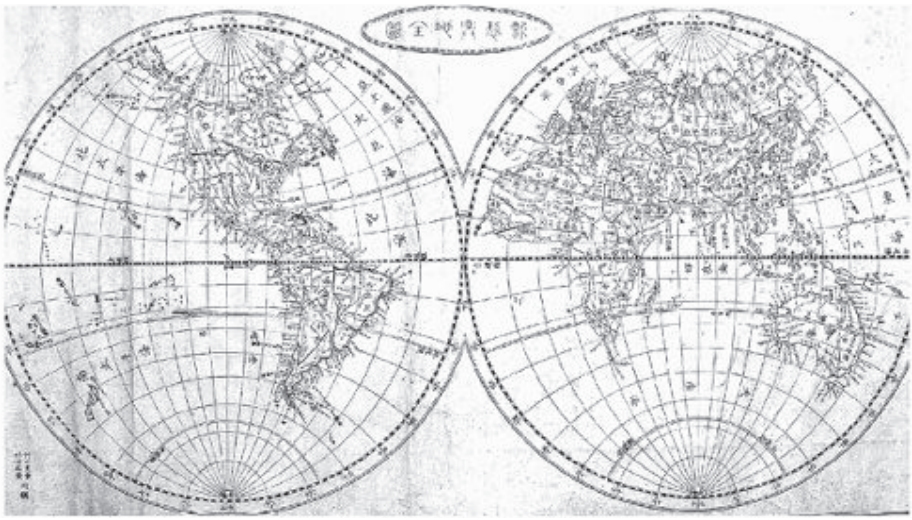
戸田の技術、明治日本の造船をリード

ロシア人帰国用の帆船は英龍が没した直後、1855（安政2）年3月に竣工した。ヘダ号と名付けられ、ロシアでの呼称は「シコナ号」といった。2本以上のマストのあるスクーナー船。これをモデルとしたのが君沢形、その半分に縮小したタイプのものを韮山形という。ともに6隻ずつ建造、品川台場に配備された。

この「ヘダ号」1隻だけではディアナ号乗組員500人余を乗船させることができず、幕府は米国商船に依頼し同年2月9日、士官数人と下士官150人を先に帰国させ、続いて同年3月23日、プチャーチンほか47人は「ヘダ号」で、残員も6月1日、米国商船と下田に停泊中のドイツ商船でそれぞれ帰国した。ドイツ商船で帰国した乗組員は、途中英国船に拿捕されるというおまけがあった。

ヘダ号とともに造船した君沢形、韮山形の新船3隻の建造材として網代村、河内村、武州多摩郡木曽村、武州荏原郡小山村、武州秩父郡大滝村、相州淘綾郡山西村、藤沢宿坂戸町、相州大住郡中原などあらゆる韮山代官所内御林から松、カツラ、杉などが伐り出された。

また、「君沢形壱番御船」は鯨漁御用を命じられた中浜（ジョン）万次郎の建議により、59（安政6）年3月、品川を出航、小笠原方面に向かい捕鯨を実行しようとしたが、台風に遭い下田に帰着した。万次郎は咸臨丸で米国へ行ったため、しばらく捕鯨はできなかったが、63（文久3）年3月17日、再び父島を出航して捕鯨を行った。



1861（文久元）年に彫られた『新製輿地全図（世界地図）』で、当時の世界を地球規模で知ることができた。

ロシア政府は帰還の翌56（安政3）年10月11日、ヘダ号に大砲52門を搭載して、下田港に入港した。これは帰還の謝礼として贈られたもので、そのまま江川氏の所管となり、後年函館港で腐朽したという。

この造船に携わった船大工のうち、上田寅吉は技術の優秀さを幕府に認められ、同年長崎伝習所に派遣された。当地でオランダ語を学びながら西洋の造船技術を修得し、61（文久元）年に榎本武揚、西周らがオランダで造船技術を視察した際に随行し、学んだ。

67年（慶応3）年、幕府が同国に発注した開陽丸に乗って帰国した。70（明治3）年、横須賀海軍工廠設立に及び初代工長となり、多くの軍艦を建造し、日本造船界の発展に寄与した。

緒明嘉吉の子、緒明菊三郎は7番台場跡で造船を行い、明治造船界をリードした。7番台場は完成しなかったが、三分ほど造成して終了していた。ここを埋め立てて造船事業を行った。

渡辺金右衛門は石川島造船所で君沢形と呼ばれる洋式船の建造に従事した。その子忠右衛門は横浜における民間造船業のパイオニアといわれ、1909（明治42）年、神奈川台場東の海面を埋め立て、「渡邊船渠会社」を開いた。

このように戸田で行った造船技術が明治の日本の造船界を支え、リードすることとなった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

下田の英国軍艦 英龍の交渉で出港

幕府へ警備策上申も採用されず

1849（嘉永2）年英国の軍艦マリナー号が下田港へ来航したとき、その入港意図が分からず住民たちは不安に感じていた。幕府から英国船をただちに出港させるようにとの命令を受け、英龍は下田へ向かった。

下田では英国船に小舟で乗り込み、真っ先に通訳を使って「人民15万人を治める官吏である」と伝えた。すると、これまで下田奉行を軽蔑して談判に応じなかった英国人は、地方15万石支配の官吏は英国でいう「ガバテル（原文）」と同じであるとし、礼を尽くすようになった。

このようにして、英国艦長に対して手厚く送迎の礼を行い、椅子も上席にし、全ての取り扱いを丁重に行った。

このときはもちろん、54（嘉永7）年春の米国艦隊将軍ペリー来航時も、同年ロシア将軍プチャーチン来航時も、外国人に接する際は、たとえ外見とはいえ国威を落とさないよう、英龍はいつもの質素ないでたちではなく、錦繍（きんしゅう）の野袴・陣羽織、黄金の大小の刀を差した。手代や家来にも燦爛（さんらん）の袴、新調した割羽織を与えたので非常に壮観で、人目を驚かせたという。

さらに英龍の風貌は男らしく堂々として、声には張りがあり応対が明快であったため、一段と艦中の敬礼が増した。艦長から贈物があったが、これを断り、反対に英国人が希望する肉類を贈り、懇切丁寧な対応をして日本では外国船の入港を拒否していることを伝えたので、彼らも納得して出港していった。

江戸へ帰ってから、下田警備策を上申した。上申の大意は、次の通りである。下田は東海の大港であるが、平日の警備が手薄で、一朝有事の際、列藩へ申達して人数を差し出そうとしても、険しい山々を越えて出向かなければならない。とても急速には間に合わないので、敵が侵入しても悠々下田を占拠できてしまう。江戸への廻船の妨げになれば、なす術もなく困窮してしまう。

かねてから警備兵を差し置くようにしたいと思い、かつ容易ならざる敵には相当の対策を講じなくては国を守ることができない。もっとも警備する大名も人選しなくてはただ一つ見栄によっては、何も用に立たない、云々。

このような内容であった。しかし、幕府には外国に対する緊張感がなく、建議は受け入れられなかった。

（江川文庫嘱託学芸員　橋本敬之）

マリナー号退帆のときに英龍が着用した蜀江錦（中国の蜀で生産された錦織物）の野袴